
No.0 !

軽い雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

No. 0 !

【Nコード】

N0840X

【作者名】

軽い雪

【あらすじ】

主人公、村雨は、トラック事故に合い、死亡。実はその理由は「神の失敗」が原因というテンプレな物だった！？ この物語は主人公が神に平民の男の子に転生させられた「ゼロの使い魔」の世界で願いで叶えられた能力を使って生きていく話です。今作品は作者の初めての作品となります。色々と可笑しいことがあるかもしれませんが、見てくれるとありがたいです！

No. 1 「プロローグ」 (前書き)

どうも軽い雪です。

一度間違って短編で投稿してしまったプロローグですW
ご指摘してくれた方、ありがとうございます。

では、どうぞ。

No. 1 「プロローグ」

「知らない天井だぜ☆」

…ごほん、開始初っ端から弾けてしまった俺、村雨だ。

現状を報告するとすれば、死んだと思った知らない天井が見えた。つてところだ。

『大丈夫ですか、主に頭が。』

「大丈夫だ、問題ない…ってかおまい誰や？」

神だ！目の前に神がおる！

——まー予想なんですけどね？

『知ってたんですか…？』

「いんや、違う。…というかモノローグもとい俺の思考読むなんてお前神だろ、」

『そうですか、…まあそれは良いとして』

良いのかよ。

それは兎も角、この人、神であることを否定しなかったよ！
やっぱりテンプレか！『ごほん。』おっと。

『すいませんでしたあ！』

わーお、見事な土下座だね！そういえば、【土下座】ストラップと

かあったな。

何気ストラップはやってんだよ。myフレンドの筆箱にジャラジャラ。シークレットもあったな。

ん、過去を思い出してたけど気にスナ。

それは兎も角、目の前で土下座しているのは割りと若い姿をしている自称神。

——って追い待て、なんで俺は土下座されてんだよ。

『私のミスで（省略）貴方は死んでしまったんです……。』

「はあ！？…要するにアンタの事務用インクが俺の生命を現す、紙に落としてしまったと？」

…さてよ、でも俺の死因、溺死じゃねーから。あ、別に死因とは関係ないのね。

トラックに吹き飛ばされてスプラッタな筈だから！

因みに人間って首ぎっちゃんしても、血が流れている数秒——それこそほんの数秒だが、生きてんだぜ！？

あれはトラウマもんだわ。というか吐いたな俺。

『そこで私は・・・私の上司なんですけど、その上位の神様から貴方を侘びで転生させなさいとの志命を受けたんです。』

「なるほろ。で、俺は生き返られるのか？」

人間、二度目の生が得られるなら、泣いて藁にしがみつくぜ。
つまりは俺もその一人ってわけだ。まあ、特に未練もないからこんな平常心でいられるんだろうけども。

『元の世界には無理です…すみませんけど、それが掟となってるので…。』

「はあ、して、その掟ってなんぞ？」

「――つまりは、俺をもといた世界に戻すと、輪廻の輪が崩れるらしい。」

それってやばいのって、聞いてみたよ。そしたら、目の前の神様、顔青くしてたよ。

よっぽど酷いことが起きるんだな。すげー気になるぜ☆

正直、納得の？な？の字もたいして出来てないが、生き返られるなら結果おーらい。

「んで、なんなら俺を生き返らせることが出来るんだよ？」

『えっと…簡潔に言えば、いられるわーど平行世界に転生してもらいます。』

「それって、創作の世界とか、なのか？」

はい、と頷く神に俺のテンションはじわじわ上がり始めた。どうせ楽しむなら、楽しもう。―そして一番気になる部分、お願いをどれほど聞いてもらえるかは…。

『CAPCTYは4つまでですね。…私より上位の存在になれば、まだ増やせますが…。』

「あー、それで十分な気がする。」

ひゃっはー！

お願いごとは4つまで。やったね！

ならばどんなお願いをするか。

あー、こういう時って、いざとなるとどんなチートにしようか迷うな…。

というか、チートの基準がわからないし、それらしいバトル漫画も少しも持ってねえ。

「うーん…なら一個目は…。」

一個目。

思いついたのは、ゲーム「キングダムハーツ2」からNo. 13，No. 9の能力を得る、というものだった。

しかし、神様の『機関全員の能力を使えるようにしますね』との一言により、全取得。

どうやら武器も使えるらしい。

二個目。

二つ目以降は悩んだ。

正直、一つ目で「僕、満足！」と草薙○君ボイスが響いたのだが、どうせなら何か追加することに。

ノーバディーを創り出す能力にすることにした。ーダスクからトライトワイトゾーンまでなんでもござれだ。

…確かノーバディーの発生条件やらなんやらある気がしたが、まあ気にするな（何

三個目。

とりあえず、不老にしてみようことに。

これで、好きな時まで生きられるし。さすがに不死は気がどうにかなりそうだからな。

四個目。

容姿をNo. 13の姿に。

なんだかんだで好きなんだよねロクサス。

うん、僕、満足。

ついに旅立ち時が来たようだ。

『それじゃあ、貴方の行く世界ですが、【ゼロの使い魔】の世界です。』

「え、それって何処——うわああああい。」

何処ですか、と問おうとしたらいきなり視界がぶれ、気づくと謎の穴にまっさかさま。

嫌な予感しかない俺だった。

『あら：そういうばノーバディーって不老だったはず…
：後でお詫びと訂正加えなくちゃなあ：。』

No. 1 「プロローグ」(後書き)

色々と可笑しい部分も出てくるかもしれませんが、がんばります。

誤字や認識の間違いがある部分は報告していただけるとありがたいです。

それでは。

10/20 神様の最後の一言追加。

No. 2 「転生、そして能力詳細」 (上) (前書き)

どうも、軽い雪です。

今回は、転生と機関メンバーの能力について、です。

ノーバディー創造の部分はどうかと思ってるんだよね…。

あんま長い訳じゃないですけど、色々と整理したいと思うので
上下分けました。

名前については深く考えないでくださいw

No. 2 「転生、そして能力詳細」 (上)

ここはトリステイン王国内のある村。

その小さな村のひとつの家。

「生まれたぞ！」

「男の子ですって！」

「わー、すごい！」

その家で、一人の男の子が生まれた。

「おぎゃあああ、おぎゃあああ。」

その子供の名前は「ヴェン」。

産声を上げるその子は――。

「おぎゃあああ。（なんてこったい…）」

転生した村雨、その人だった。

俺だ。村雨だ。

意識が無くなったと思ったら、次、目を覚ました時はこうなっていた

んだ。

——畜生、あの神、急に俺を急かしたのはこのせいか！

「リーナ、見ろよ、俺たちの子供は無事に生まれたぞ…！」

「え、ええ。私たちの子ね。…ふー…疲れたわ…」

どうやら声の主が俺の親らしい。

つまりは俺…村雨は赤ちゃんに転生したらしい。

——あれ？確か、お願いの中に、「不老」あったよな？大丈夫か？

（大丈夫ですよ。一応、見た目それなりの大人で止まるようにしておきました。）

あれ、答えてくれた。

まあ、とりあいずこれで一生赤ん坊、とかいう詰み状態は回避できた。

しかし、そろそろ赤ん坊の本能（？）で叫び続けたので疲れた。それに、眠くなってきた。

「おぎゃああう。（ねーむー。）」

そして俺も母となった女性の腕の中でこの世界初めての眠りについたのだった。

☆☆☆☆

キングクリムゾン。

——ぶっちゃけ、五年程時を飛ばさせて頂いたぜ！

赤ん坊の毎日は發揮しいって退屈だろうからね！

さて、現在五歳の俺は、周囲に愛されて育つ事が出来た。

直ぐに立って歩いたり、少しだが話せるという成長の早さに、両親と周囲を驚かせた。

正直、後から、これって異常な見せて良かったのか？と、不気味がられるかと内心ヒヤッとしたが、思いのほか抵抗がないらしく、いまでも変わらず普通の子供として扱ってくれていた。

この村はセンチュエル公爵という貴族が治める領地のひとつで、他の北村、西村などとまとめて、「センチュエル領」と呼ばれているようだ。どうやら、貴族や平民、そういう隔たりがあるところを見ると、割と昔な時代らしい。

そして、この世界には、御伽噺ともいえるような物が存在していた。

「魔法」だ。

会話で飛び交う「魔法」という単語に、俺は毎回聞き間違いかと思

い首を傾げていたのだが、実際に母が魔法で物を動かしているところを見て、信じざる終えなかった。

に、しても。

実際、魔法使いが出るような小説や漫画で【ゼロの使い魔】というタイトルは聞いたことが無いな。

ハリー・ポッターとかなら…まああれは有名だしな。

「まー、いいかあ。」

実際全然良くないのだが、まあ目的の一つ「平和に生きる」という目標は達成したい…と思うな。

あー、でも魔法使いの世界に來たのだから、無論、魔法は使いたいと思う。

魔法使いになれるのは最初から決まっているらしく、両親、または先祖に魔法使いの血を持つものがないと使えないそうさ。
平民にはその血が流れていないものがほとんどで、魔法が使えるのは貴族の者たちがほとんどだそうさ。

まあだから、貴族と平民という格差があるんだろうな。

この世界では魔法は圧倒的らしいし。

因みに、母はメイジであるのに、何故貴族でないのかというと、没落貴族なのだそうさ。

そこで平民である父と出会い、今があるらしい。

――で。

肝心の魔法適正といえば…。

「せんせー、杖契約ってどうするんでせう？」

「何いつてるのヴェン。…ほら、もう一度よ。」

母に契約の仕方を教わるも、それらしい反応すら見せない始末。

…おい、父ちゃんなんでホツとしてんだ！？

「良いじゃないか、リーナ。杖契約だって何週間もかかる奴もいるらしいじゃないか。」

ふーん、そうなのか。

でも、それっていつか使えるって事なんだよな。それじゃあ別にホツとすることでもないような。

「それに、『魔法が使える』ってだけで、仲間はずれにされるかもしれないだろ？」

さ、流石は我が父…そこまで考えてくださるとは…！

「それもそうねえ…、でも我が子がどれほど魔法が使えるかと思うと、わくわくしない？」

まあ、僕も気になる事は気になるけどね、と子供のように目を光らせる母を見ながら苦笑する父。

どっちかとゆーと、夫婦ってよりも、兄妹みたいだな。

さて、魔法のことは兎も角、与えられた能力のほうを試していたのだが、具体的に判らないことが多すぎる。
何故判らないのかというと、単純に人目を忍んで実験するタイミングと身体がこの5年間、無さすぎた。

「しっかあああっし！今こそ、実験の時が来たのだ！」

静寂。

所変わり、現在俺は村の近場にある森へと来ていた。

無論秘密の実験なのでギャラリーは居ない。：始めるか。

さて、今回始めに試したい事は決まっている。

『ノーバディーを創造できる』これをやってみようと思うんだ。

ただ、少し考える事があって、『創造する』事は出来るが『従わせる』事が出来なければ意味が無い。

ノーバディーに襲われて死ぬとか、ありそうで怖い。

「…やっぱ、機関メンバーの能力のほうがいいか…。」

という事でれつつとらい。

おっと。

その前に、ここで機関メンバー毎の武器を紹介。

No. 1…ライトセーバー二刀流。腕から直接赤いのが出ていた。
武器の正式名称は「エリアルブレード」。

他にも軌道が様々なビームや分身など。属性「無」

No. 2…クロスボウのような武器から、ビームなどを放つ事が出来る武器。武器の正式名称は「ガンアロー」。

重力を無視した逆さの状態になったり、瞬間移動、空間変異、腕だけ転移させる事も出来る。属性「空間」

No. 3…特殊な形をした槍。本人は風の力を操り、六本同時に扱っている。武器の正式名称は「ランス」。

槍を竜のように変化させて暴風を放ったり。属性は勿論「風」。

No. 4…主に氷の力を凝縮させた盾。（本人は科学者で戦闘に向いていない。）武器の正式名称は「シールド」。

氷結の刃を作り出して敵を切り刻んだり、氷漬けにしたりする事が出来る。属性は「氷」

No. 5…巨大な斧のような大剣を用いる。武器の正式名称は「アックスソード」。

武器を直接振るうは勿論、投げつけたり、地面を隆起させたり、機関一の怪力を誇る。属性は「土」

No. 6…本など、「魔術書」のような物を使う。正式名称は「レキシコン」。

幻術で敵を翻弄、幻術世界に捕らえる事も出来る。武器をコピーする能力も持ち合わせている。属性は「幻」

No. 7…大振りな剣を使う。武器の形状はどちらかというとメイスやハンマーに近い。正式名称は「クレイモア」。

月の力を浴びると「バーサーカー」状態になり、武器が展開したり、口調が荒々しくなる。属性は「月」

No. 8…棘がついた手投げ武器を二つ使う。戦闘では常に炎を纏わせていた。正式名称は「チャクラム」。

手裏剣のように投げつけたり、乱舞のように投げ敵を燃やし尽くす。炎の牢獄を創り出す事も可能。属性は「炎」

(チャクラム(チャクラ)は古代インドで用いられた投擲武器の一種。戦輪、飛輪や、円月輪とも呼ばれる。真ん中に穴のあいた金属製の円盤の外側に刃が付けられており、その直径は12-30cm程。投擲武器としては珍しく斬ることを目的としている。投げ方は

二通りあり、円盤の中央に指をいれて回しながら投擲する方法と、円盤を指で挟み投擲する方法がある。by Wiki

No. 9…ギターののような楽器を使って、水を操る。武器の正式名称は「シタール」。

強く掻き均す事で、無数の巨大な水柱を発生させることも可能。属性は「水」

No. 10…トランプカードを使う。柄はノーバディマークが描かれている物。武器の正式名称は「カード」。

敵をサイコロ、カードに変えたり、自身がカードの化けたりすることも出来る。属性は「時」

No. 11…身の丈ほどもある鎌を使う。武器の正式名称は「サイズ」。

『*死の宣告』や、鎌を連続で振り回したり、敵を追跡する禍々しい力を放つ事が出来る。属性は「花」

(*この死の宣告は、原作では主人公のLvでカウント数が決まり、攻撃を受ける事にカウントが減る仕組みになっている。)

No. 12…指の間に複数挟めるほどの大きさのナイフを使い、電撃を操る。武器の正式名称は「ナイフ」。

テレポートや*分身、電撃、両腕から巨大な轟雷を放つ事が出来る。属性は「雷」

（＊分身が受けたダメージは本体にも入る。No. 1の分身や影分身などとは違う扱い。）

No. 13…鍵の形をした剣を使う。光の柱を剣から発生させることも出来る。武器の正式名称は「キープレード」。

戦闘では殆どが二刀流で光の柱とも交えたコンビネーションで戦う。属性は「光」

うーん…一番気になるのはやっぱりキープレードだな。
二刀流なのかそれとも、一本なのか。
さて、と。試してみるとしますか！

（下に続く）

No. 2 「転生、そして能力詳細」 (上) (後書き)

改めてみると、期間メンバーの能力ってチートだよね…。

説明不足かもしれないけど、後々能力使用の時に説明すると思います。

色々と独自解釈が入りそうだけど；；

誤字、認識の間違いがあればお知らせください。

N o. 2! 「

(タイトル同)

下」

(前書き)

更新が不定期。

No. 2! 「(タイトル同) 下」

下

キングダムハーツの主人公は、14歳でキープレードを振るっていた。

まあ、単純に何が言いたいかというところ。

「…うぐぐぐ、重い…」

5歳と14歳では筋力が圧倒的に違う。

…これは鍛えないと始まらないなあ…。二本を軽く振るってたとか尊敬するわ。

キープレードっていうと、初期武器なんかを見る限り、軽い、っていうイメージがあるんだよな。

ほら、王様とかだって振り回してたし。

どうやら、キープレードは一本のみのようだ。

…でも称号は？めぐりあう鍵？だしな…マークも二本のキープレードが交差したものだし…。

No. 13が初めて二本キープレードを手にしたのは…うーん。何か条件でもあるのだろうか。

それは兎も角。

使用者に合わせて重量が変化するとか都合の良い事は起きない訳で。仕方なくキープレードを地面に放置すると、他の武器にする事にした。

「エリアルブレードか…？あれは持つっていうより、腕から出てるって感じだしな。」

他にも、カードやらナイフでも良いかもしれない。

一つ気になるのは、殺傷能力だ。

全年齢対象のゲームなので、無論死亡シーン等、グロが無いだけに、本来の殺傷能力が分からない。

確か、キングダムハーツには『死』という概念は無いんだっけか。

「まあ…別に人を殺したいなんて思わないからそっちのほうが楽なんだけどなあ」

閉話休題。

能力を使う方法は、機関メンバーの称号を唱える事で出来ると、神に一応言われている。

「狭間の指導者」

これはNo. 1リーダーである、「ゼムナス」の称号だ。

ブオン、というライトセーバーが立てる音と同じ音と共に両腕に赤い鮮やかな光を放つブレードが現れる。

手の甲に現れるノーバディーマークを中心に、モノクロ色の茨が浮かび上がっている。

それと同時にキープレードが光の粒となって消えた。
能力重複は駄目らしい。―それより。

「うお：生ライトセーバーが見られる日が来るとは：か、感動だ」

試しに腕を上下に振ると、ブォンブォンと、音が経つ。

段々楽しくなり、テンションが上がっていた時。

ジュツ

「うお：。」

落ちてきた葉がエリアルブレードに当たった途端、溶けるように消えてしまった。

——：えええええ！？

どうやら、エリアルブレードに殺傷能力あるようだ：というか、下手したらいうか下手しなくても扱い次第では自爆しそうだな！？正直、これが自分に当たったらと思うとテンションが一気に下がった。

——取り扱い注意すぎる。

「と、とりあいず、解除。」

スツと音も経てずに消えるエリアルブレード。俺はそこでホツと、一息吐いた。

この様子だと、他の武器にも殺傷能力はあるのだろう。：護身には十分だけど、できれば使う時が来ない事を祈るばかりだ。

と、その時。

ガササツ！

と、何かが茂みの向こうで動く音がした。
…やヴェ、見られたか!?…でも、こちらに近づいてるような気が…。

俺は咄嗟に近くの茂みに身を隠した。

ズシン、ズシン、と『何か』の足音が聞こえる。——この音は…人間じゃない…?

「ブヒイイッ!」

まもなくして、『ソイツ』は茂みから出てきた。
人間に近い大きな胴体に豚の頭。

「…オーク…?」

そう、オークだ。知能は低く、行動パターンも単純な亜人と言われる種類であるが、その図体から見ても分かるように、獲物である棍棒で繰り出される攻撃は凄まじいという。

彼らの主食は肉で、動物の物は勿論、人間のものまで食らう。
人間の子供の肉が好きと言われ、正直、絶対見つかりたくない。

見つければ、最悪、生きたまま食われる可能性がある。

子供の足では逃げ切れる筈もない…俺は村に引き返すべく、静かに歩を進める。

…しかし、現実とは非情な物で…。

ゴッ、

「ブヒッ!？」

「うげえ!？」

木の根に足を引っ掛けて盛大に音を経てしまった!

無論、それがオークに見つからない筈も無く、その目は正確に俺を捉えていた。

不味い…こうなれば逃げ切る事も出来ない。

何故か非常事態にも関わらず落ち着いている事に感謝しながらも、策を頭で考え始める。

能力で対峙しようにも、一撃でも相手の攻撃…あの棍棒が直撃してしまえば、ミンチに化してしまいそうだ。

避けきる自身もないのに、接近するのは避けたい…。ならば。

「(こうなりや、ガンアローでも使うか!?...だが...もし当たらなかつたら?)」

実際、銃なんて一度も手にした事も無ければ、打った試しなんてあるわけが無い。

そんな素人が目の前の巨大とはいえ、オークに当てられる自信は、無い。

「ブヒイイイッ!」

「う：ガンアロー以外じゃあれをやるしかねえか：一か八かだ！」

大好きな人間の子供にあり付けるかもしれないのだ、そんなチャンスをオークが見逃す筈があるわけが無く、
オークは雄たけびを上げると、歩き寄ってくる。

「出て来い！サムライ！」

そう。ノーバディー創造である。

これで、目の前のオークを倒せるか兎も角、時間稼ぎが出来る筈だ。

そして。

虚からシャキン、と鞘から刀を抜く音と共に、助っ人^{サムライ}が現れた。

サムライというのは、目の前のノーバディーの種類の一つで、NO.13の配下ノーバディーにして上位の強さを誇る一体だ。

その容姿は、侍が着るような袖の長い服を着て、全身が薄く藍色がかっている。一見、刀を二本指しているので二刀流だと思っだろうが、実は背後で重力を無視したように浮かぶ『鞘』も同時に扱う、四刀流の使い手。

この侍が俺に従ってくれる事を願いつつ、

「目の前のアイツを倒してくれ！」

と命令、というかお願いをしてみた所。

「……（コクン）」

やったああ！頷いてくれたああ！

一か八かは成功した。：これでサムライが頑張ってくれたら助かる。
なんて、俺の考えが甘かった。――良い意味で、だが。

「プギッ!? プギイイイイ！」

「…」

突然のサムライの出現に驚いていたオークだが、目の前の存在が敵だと分かるや否や、棍棒で仕留めようと振り下ろす。

ブウォン！

が、それはサムライにヒットする事なくすかぶった。

バックステップでフワリと飛ぶように避けたサムライは、柄に手をかけ。

シュシュシュ…

ゆっくりと、引き抜いた。

鞘から引き抜かれた、愛刀（?）は日の光を反射して、鈍く灰色に

光る。

「ブヒイツ」

棍棒を構えなおしたオークは、相手が武器を構えているのを見るや否や。

ブォオン！

再び振り下ろす。

サムライはそれを避けようともせず、抜刀した状態で立たずんでい

る。
「あ、危ない！ 避け――」

サムライは腕を素早く動かしていた――目に見えないほどのスピードで。

「プギイツ！？」

音も無く振るわれた刀、それは振り下ろされようとしていた棍棒を叩ききっていた。

ゴドン、と鈍い音を立てて真つ二つになった棍棒。

巨大な木を荒削りして作ったような太いものが、一振りで切られていたのだ。

「…、以外と鋭利…。」

逃げる、という行動が頭から離れるほど、鮮やかな太刀使い。

俺はそれに見とれていた。…否、見とれる事しか出来なかった。

「プギイイ！」

獲物が使い物にならなくなった事に怒っているのか、乱暴ではあるが、先ほどよりさらに鼻息を荒くしてサムライに掴み掛かる。

サムライの鞘がその腕を殴打して、オークが一瞬、一鳴きして怯む。

——その一瞬。

「ブヒッ——」

この大陸では見られないはずの、桜の花びらが散るような幻影が見え…次の瞬間、サムライの姿が忽然と消え、オークの背後に現れる。パチン、と鞘に刀を収める音と共に、オークの上半身と下半身が別々に崩れ落ちた。

「うえ？…お…おう…えええ」

それまで、見とれていた俺だったが、何かが液体が顔に掛かるのを感じた。

勿論、オークの大量の血と肉を見た俺は吐き気を催していた。

頭が豚の怪物だとしても、例えば俺が直接手を出した訳じゃなくて…。

結局、耐え切れずに、嘔吐リバーズしてしまった。

数分が経ち、俺は漸く落ち着つき始めていたが、まだあの光景が脳

裏から離れない。

これ以上考え事も止めて、早く家で休みたい気分なんだけど…。

「……」

隣で、命令を待つ従者の様に佇む者…先ほど創造した、サムライ。彼(?)…他のノーマディに共通して恐らく、喋れない。無論、そのどちらかといえば人間の物ではない頭にも口と思われる部分が無いし。

ん?待てよ…でもダスクって喋ってたような?

まあいいか。と、俺はサムライを改めて見つめる。

何故か、あれほどのオークの血飛沫だったのに、体所か、刀にすらなにも掛かっていない。

俺はその事に繭を潜めたが、まあ今は別に良い…血は見たくなかったし。

これ(サムライ)を如何するか、それが問題なのだ。
創造するだけ創造したものの、還し方は無い。

と、なれば、必然的に隠さなきゃならないな。
隠しておける場所なんて、この森ぐらいしかない。
いっその事、

『森で拾ってきたー!』

「…ないわ。」

怪しすぎる。

万が一：ありえる訳が無いが、親が受け入れてくれたとしても、村は違うだろう。

——とりあわず、サムライには『森で人に見つからないように行動』してくれと、頼んでおいた。

…これで多分大丈夫だ。

この森は資源に向いた木が少なく、立ち入りも他の方角にある森より圧倒的に少ない。

しばらくは、秘密基地のように使えるだろう。

と、なると、ここで鍛錬するか？ 家族に見つからないようにするべきなのだろうし。

強くなるにしても：単純に能力無発動でもある程度戦えるようにしなければならぬ。

——それ以前に武器を振るう力がないと技術も磨けやしない。

「うん、筋トレになる事はじめなきゃな」

この後、帰宅したら、体中泥だらけなのと、時間も遅かったため

こっぴどく母に叱られた。

平民である俺の日常は続く。

No. 2! 「(タイトル同) 下」(後書き)

うーん、機関やノーバディにはまだ謎な部分が多すぎる…。

やっぱり、自己解釈や想像が入ります。

一応、オリ主にいずれかキープレード二本を持たせたいな、と思っています。

No. a! 「説明と設定」 (前書き)

どうも、軽い雪です。

今回は、「ノーバディ」を知らない人向けにがんばって書いてみました。

にしても、どう物語を進めるか計画を立てないといけないなあ。

No. a! 「説明と設定」

【ノーバディーとは？】

闇に心を奪われてハートレスになった人間が強い心や思いを持っていると、稀に生まれ落ちることがある生物。

（闇＝ハートレス）だと考えていただければ良いです。

通常、キングダムハーツの世界では、ハートレスに心を奪われると肉体と魂（心とは別）も消滅します。

然し、冒頭でも書いたように、強い心、思い等を持っていた人物がハートレスに心を奪われると、

稀に肉体と魂（記憶？）が異なる世界で残る事がある。

それが、ノーバディー。

体の形は人に近い形になっている者が多く、（サムライもそれに当てはまる。）色は白や銀の部分が多い。

ハートレスの殆どが、丸みを帯びた形に対して、ノーバディーは角ばったり、鋭利な形をしている。

光でも闇でもない（二つは裏と表のようにハッキリしているため強い）狭間（無）に近い存在で、

ある程度短い間行動できるだけで程なく闇に溶けてしまう（実際に溶けるのではなく、「闇に消えてなくなる」という意味）。

然し、戦闘能力が低いのかと言えば、そうではなく、一個体ではハートレスよりも上で強い。

動きは様々で、一見、心を持っているかのような感情的な動きをするが、心は無い。

実際にゲーム中でも「存在しない者」「誰でもない者」「抜け殻」と言われている。

（関節や重力を無視したような動きをするため、プレイヤーの一部からは不気味がられている。）

ハートレスが心を求めて本能で動いているのに対し、ノーバディーは知性を持って行動する。

また、体の何処かに、ハートレスに付いている、ハートの「エンブレム（マーク）」のように

逆さまにしたハートと十字架を組み合わせたような形のシンボルマークが付いている。

これは「心が無い」という事を表すそうだ。

存在しない者という呼称からか「死」という概念はなく、その最期には「消滅」という語句が用いられる。

【十三機関 『正式名称…XIII機関』】

人がハートレスになる時、特に強い心を持った者は、人であった頃の面影を残したままノーバディとなることがある。

XIII機関はそのような13人のメンバーで構成されている組織で、下級ノーバディを支配・統率しながら、

目的を達成するために数々の世界で暗躍しているようだ。

特徴としては皆同じ黒いコートを着ていて、それぞれが専用の武器・

司る属性・専属の配下ノーバディを持ち、人間だった時の名前に異端の証である「X」を足してアナグラムにしたものを新たな名前としている。

感情があるような振る舞いを見せるが、実際は心を持たないため、人間だった頃の記憶に基づき感情があるフリをしている。

ナンバーは入った順に決められ、リーダーである『ゼムナス(Xemas)』は無論No. 1。

なので、番号が若い(小さい)ほど、昔からいるメンバーということになる。

正規メンバーではない。ナンバーと実力は必ずしも一致している訳ではなく、ナンバーが若いからといって機関内での立場が高いとは限らないという。

(それを表しているかのように、十三機関で一番最初に倒されたのはNo. 4の『ウィグセン(Vexen)』だった。)

因みに公式では戦闘力はゼムナスが最も強く、それに続くのがザルディンとレクセウス、そしてロクサスであるという。

ノーバディは年を取らないため、機関員の年齢はノーバディになった時点での外見年齢のままになる。

公式で解っているのはNo. 13の『ロクサス(Roxas)』のみ。

（あれ？…「ノーバディーは年を取らない」だって？！＊注意…主はこの説明を書いてて初めて気づきました。）

因みに、機関にはもう一人、正式ではないメンバーが居る。

機関No. 14 『シオン（Xion）』。

基本的にロクサスと同じく光属性を司り、キーブレードを使う少女。能力としては殆ど被るので、小説内では出ないかもしれません。因みに、ロクサスがキーブレード二刀流へと覚醒したのは、彼女が関係しています。

正体は「レプリカ計画」に基づいてヴィクセンが作成したレプリカ人形の一つで、シオンは中でも一番の成功作「No. i」である。

そのため実際はノーバディですらなく、それが理由で機関のメンバーとしては正式にはカウントされていない。

ロクサスの能力をコピーさせることでキーブレード使いの「予備」を機関が確保することを目的に作られた。

機関にとっては多少のズレがあっても最終的にシオンがロクサスを上回れば、ロクサスを処分しても構わないと考えていた。

ロクサスやNo. 8であるアクセルとは親友の関係。

途中まで自分が「人形」であることは知らなかったようだ。

【今小説での能力設定】

「機関メンバー全員の能力使用可能」

No. 1～No. 13までの機関メンバーの能力を使う事が出来る。重複は現時点で不可能で、予定ではあるが、同時に二人分まで重複できるようにしたいと思ってます。

何故シオンを今含まないというのかというと、正式な「機関メンバー」ではないので。

それと、機関No. 5の武器、「アックスソード」についてですが、これ、名前からもわかるように重量武器なんですよ。 「キープレード」一本まともに振れないのにまともに使えるようになるのは何時になるんだよ、ってな感じになりました、「能力」としてその馬鹿力を発揮できるようにしようと思います。

：良く考えたら鎌とか槍とかも難しいよね…。 まあこれらはなんとかして持てるようにします(汗)

(機関の登場作品は、「KHCOM」^{キングダムハーツ}「KH2」^{ファイナルミックス}「KH358/2」

：一応ゼムナスだけなら「KH1FM」にも

隠しボスとして出てましたね。

「358/2」では機関メンバーであるロクサスが主人公で、他の機関メンバーも操作できます。

なんというか、「358/2」は手元に無い上、プレイしたのも大分前だったのであやふやです…w)

機関は全員が共通して「FF魔法」^{ファイナルファンタジー}が使えます。

・ファイア ・ブリザド ・サンダー ・ケアルガ

(といっても、KHのまほう(KHでは魔法とは呼ばない。)は、FFの物とはエッセクト等が違う物です。)

その他にも「マグネ」や「ストップ」などという魔法がありますが、

機関メンバーは使用していません。（恐らく。）

なので、オリ主も機関の使えないこの魔法は使えないことにします。

「ノーバディーを創造する能力」

本来、ノーバディーは「心の強い者がハートレスに心を奪われる」という条件が必要ですが、

この小説では、それを取っ払ってます。

ただ、この能力は、その機関メンバーに「配下」と言われる専用のノーバディーが居る場合、そのノーバディーしか創造できません。

逆に機関メンバーの能力を使ってない場合は、どんなノーバディーでも呼び出せると言う事です。

小説内では既に、ノーバディーの種類の一体「サムライ」が出てくれています。

因みに、小説内で主人公が内心考えていた「ダスク」というのは、ノーバディーの中でも二番目に弱い下級のノーバディーです。

他に、さまざまな種類のノーバディーが存在しますが、それは本編で。

因みに主は「サムライ」が好きなので登場回数が一番多くなるかも
(あ)

「?????」

不老に変わり登場する能力です。

後付になる予定ですが、いまでもその能力は決まっています（汗）

【本小説における、オリ主の立ち位置】

最初は「ノーバディー」の能力を得たオリ主がルイズに召還される」という物でした。

しかし、そうになると、本来呼ばれるはずである「サイト」君が登場できないんじゃないか、という問題に当たりまして。

まあ、今おもえば、「二人同時召還」という手も在ったのですが、ガンダールヴとかどうしよう。って感じになるような。

近々、「ルイズ召還」verも一話だけ特別話として投稿してみようかと思っています。

——さてさて、この小説での立ち居地は作者の予定では

「近い場所でルイズ達を見守り、原作で起きる悲劇等を回避する手伝いをする」

という、案外地味な立ち居地となっています。

実際、もっと派手な立ち居地になりたいというのもありますけど、原作よりハッピーな展開をサイト、ルイズ達と繰り広げたい、という思いもあり、「召還」verではないこの立ち居地になりました。

「貴族から始めれば（に転生すれば）、教師になるなり出来て楽なんじゃない？」

無論、その設定で行くのも考えましたが、

誕生↓魔法教育↓学園生活↓成人↓先生　…大分大雑把にしましたが、先生になるまでに踏むステップが多く（自分からして）

「これ、続ける自信ないなあ…。」と、思わず苦笑い。これを書いた他の作者様を尊敬しました。

自分としては、原作に早く突入してえ！って、我慢できるわけがないので、平民にしましたw

「おいおい、待てよ、平民で行くならいいとして、どうやってルイズ達を見守れる場所に落ち着くんだよ？」

実はこれ、相当迷いました。実際、トリスティン魔法学院に居る平民の人たちってメイドだとか、コックとかしか居ませんよね？

（実は作者、アニメにしか見ておらず、おまけに小説は『外伝　タバサの冒険1』しか持ってないという。）

今の候補としては、警備兵、って所でしょうか。

…無計画すぎて俺が泣く。　ご都合主義でも起こさなければなら
ないか…。

まあ兎も角、長々とここまで読んで頂いた方、有難う御座います。

追加10／17

【身体設定】

neem…ヴェン

身長は全盛期で180cm辺り。
体重は平均で髪の毛は金髪、目は蒼。

趣味は読書、ノーバディーの観察、
好きな食べ物は飲み物では、ビタミン微炭酸飲料MATCH。＊1
食べ物はお米＊1、ソーめん＊1、肉等。後、枝豆。嫌いな物はス
イカ、メロン。＊2

好きでも嫌いでもないのはゆで卵。

性格は基本的に楽観的でフレンドリー、責任を負うのが苦手。若干
御人好し。

テンションの上がり下がりが少々あり、喋り方も色々と変わる。
つまりはキャラが不安定。

ボケよりツツコミがいいな、というのは本人の談。

身体能力は鍛える前までは、体が軟いぐらいの一般人。
キングダムハーツシリーズファンで、頼んだ能力にもそれが現れて
いる。

ロマンだと思うのは拳と槌。＊3

嫌いなタイプの人物に対しては、評価を改めるまであまり接しない。
強く嫌悪を示すのは、奴隷商人などの外道に対して。

＊1 今世では飲めない・食べれないのでゲンナリしていた。

＊2 スイカバーも無理。

＊3 特に拳はロケットパンチ。槌はジェットが内臓されているものに引かれる。

【能力】

「13 organization mode (十三機関モード)」

十三機関のメンバー全員の使用能力を使用する事出来る。
メンバーの能力を使うには、格メンバーの？称号？を唱える。

No. 1 「狭間の指導者(The leader of an interval)」属性：無

No. 2 「魔弾の射手(Freesooter)」属性：空間

No. 3 「旋風の六槍(Whirlwind Lancer)」
属性：風

No. 4 「いてつく学究(Chilly Academic)」
(今小説では凍てつく学究。)属性：氷

No. 5 「静かなる豪傑 (Silent Hero)」 属性：土

No. 6 「影歩む策士 (Cloaked Schemer)」 属性：幻

No. 7 「月に舞う魔人 (Luna Diviner)」 属性：月

No. 8 「踊る火の風 (Flurry of Dancing Flames)」 属性：炎

No. 9 「夜想のしらべ (Melodious Nocturne)」 属性：水

No. 10 「運命を賭す者 (Gambler of Fate)」 属性：時

No. 11 「優雅なる凶刃 (Graceful Assassin)」 属性：花

No. 12 「非情の妖姫 (Savage Nymph)」 属性：雷

No. 13 「めぐりあう鍵 (Key of Destiny)」 属

性…光

基本的には、能力の無駄遣いになりそうではある。

能力についての制限は、重複不可ということ意外は特にない。

闇の回路については封印させてもらっています。…そのときになったら使えるかも。

あくまで、能力が使えるだけなので、基本スペックを鍛えなければならぬ。

因みに不老という大きいおまけ付き。流石に不死ではない。

「ノーバディー創造」

ゲーム内の敵キャラ、「ノーバディ」のあらゆる種類を創り出せる。

？その場？に存在できる数は10体まで。

合計含めて11種類が存在している。

ノーバディー等の説明に関しては、wikiや小説内で説明している巻があるので

そちらを参照してください。

「??????」

第三の能力。本来「不老」が入る所であるのだが、

作者のミスにより、ノーバディーが不老であることに気づかず今小説では肩当だけが登場している。

ヒント…荒野 礎の間 キーブレード使い

No. a! 「説明と設定」 (後書き)

誤字、認識の誤りがありましたらご報告ください。

10／17追加。

ヒント見た瞬間直ぐにお分かりでしょう。

まあ、正直追加していいのか迷いますが(汗)

N o . 0 ! 「もう一つの始まり方」 (前書き)

はい、今回はルイズに召喚される、「召喚」verです。

何故かこっちのほう書きやすいという事態。…うばあ…。
ひよっとすれば続くかもしれない。

因みに、サイト君が出ないバージョンでもあります。

No. 0 ! 「もう一つの始まり方」

ドサッ。

「ち、ちくしょう…覚えてろよ…」

長い間、あの神から落とされた穴の中を漂っていた俺だが、不意になにか「引っ張られる」…いや、「吸い寄せられる」のを感じ、目を開くと目の前に迫る「鏡」と思われる物。

そして、視界は真っ白になったと思ったら、草むらにぶっ倒れていた。

「おい、ルイズの奴、人間を召喚しやがったぞ！」

「フードを深くかぶってて解らないな…」

騒がしい。

どうやら俺は声からして、少年少女に囲まれているようだ。

…一応神は気を利かせて、服を着せてくれていたらしい、少し感謝しよう。

俺は今だ平行感覚が取れないまま、ノロノロと起き上がった。
視界がブレる。——此処は一体何処なんだよ、確か…

「先生、もう一度、やり直しを！」

「駄目だ、ミス・ヴァリエール。サモン・サーヴァントは神聖な儀式。やり直しは受付られない。」

「そんな！」

なにやら、視界の先で中年の男性と少女の声が聞こえる。

「サモン・サーヴァント」？…サモンってゆーと、あの召喚^{サモン}だよな？

という事は俺はあの少女に召喚されたと言うのか?!…んな馬鹿な…。

「アンタ、何者よ？」

少女の声で思考から現実に戻される。

視点も漸く定まるようになってきた。——目の前のピンク色の髪少女が話しかけてきたらしい。

「俺は…」

村雨、と言おうとして、もう一度口を閉じる。

——転生(?)のだから別の称でもいいのかもしれない。

「ヴェン、だ。何者だ、と言われても反応に困る。」

「?…おかしな平民ね。というかアンタ、?ご主人様?の前なんだからフード脱ぎなさいよ。」

「!…ああ、悪い。」

そう言えばといい、深く被っていたフードを外す。

フードで隠れていた顔が露見し——、周囲から息を飲む音、鼻を鳴らす音が聞こえた。

それにしても目の前の少女、?ご主人様?の所を強調してたな…と
いうことはやっぱり…。

「へ、へえ…以外といい顔立ちしてるじゃない。」

「そいつはどうも。…所で説明して欲しいんだが…。」

俺が置かれている状況が知りたくて、質問しようとした。

ある程度は予測が付いているが、俺の予測でしかない。まずは情報
収集しかないな。

「いいわよ、特別に——」「おい、ゼロのルイズ!早くコントラクト・
サーヴァントしろよ!」…」

「「「そーだ、そーだ!平民とキスしちまえ!」「」」

「う、五月蠅いわねっ！分かってるわよ！」

野次馬共に邪魔されてしまったが、俺の意識は別の所に移ってしまっていた。

——今なんていった？「キス」だって？

冗談じゃない、行き成り瑞知らずの少女とキスだなんて、良くない。然し、なんでここで「キス」が出てくるんだ？

俺が顔を引き攣らせながらそんな事を考えていると、先程の中年の男が話しかけてきた。

「失礼、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。：ヴェンと言います。貴方は？」

見事に禿げ上がった頭がいささか寂しい中年の男の人は、以外と親切な言葉使いだった。

洋服が、何処かの「魔法使い」が着るようなローブに、なにやら長い杖を持っている。

「私はトリステイン魔法学院で教師を務めます、ジャン・コルベールと申します。」

…ミスタ・ヴェン、失礼ですが何処の出身でしょうか？」

「自分は…いえ、分かりません。……記憶喪失、みたいなんです。」

俺は咄嗟に嘘をでっち上げた。

別に、日本出身です、とでも大真面目に答えて良かったのだが、これなら

後から思い出した事にすれば、いくらでも変えられるからな。

「そ、そうですか…それはまた大変ですね…。」

「失礼、変な事を聞くようですが、此処はどこでしょうか？」

まずは、此処が何処なのか。

恐らく日本ではない、というか確実に、だ。

周りの少年少女を見渡したが、黒髪が一人も居ないと、殆どが金髪だったり、とカラフルなのだ。

「アンタ、そんな事も知らないのね。…ここはトリステイン王国よ。」

「うん？…やっぱり記憶喪失みたいです…。」

そんな国、一度も聞いた事が無い。

別に世界地図を記憶している訳じゃないから、確証があるとは言え

ないが。

コルベール先生は困ったように何かを考えている。

目の前の少女は呆れたような目で「これが私の使い魔…、」とつぶやいている。

そういえば。

「君の名前を聞いてなかったな。」

「馴れ馴れしく？君？なんて呼ばないでよ。？ご主人様？よご、し、ゆ、じ、ん、さ、ま。…特別に教えて上げるわ。心にして聞きなさい。」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。それがアンタのご主人様の名前よ。」

どうやら俺はこの人に仕える事になったらしい。…不安だ。

No. 0 「もう一つの始まり方」 (後書き)

妙にルイズが親切のような気がした (苦笑)

んー…本編が書きづらいのは設定が安定してないからかな…。
近々本気で固定させないと…。

誤字、脱字、認識の間違いがあればご指摘ください。

No. 3! 「鍛錬な一日」 (前書き)

話が余りすすまねえ!

今の所、ゼロ魔らしい要素も圧倒的に少ないしな!

：それにしても相変わらず能力使用技術に進展が見られない。

このままではノーバディに頼りっぱなしの駄目な奴になってしま
いそ。

ガンダールヴなら武器もちや使い方はある程度わかるんだけどなあ

(^ω^) ∴。

No. 3! 「鍛錬な一日」

「ハアアッ!」

俺は振りかぶる。目の前で楽しげに微笑んでいる敵（父）の余裕を、少しでも無くしてやる、とばかりに。

「うん、まだまだ甘いね。」

然し、この男、実に余裕である。

…予めNo. 2「ジグバー」の能力でも使っとけば…。

俺は自分の腕だけが木刀を持って父を襲っているシーンを想像して――やめた。シュール過ぎる（笑）

だいたいそんな事したら、明らかに異常な物を見るような目で見られるに決まっている。

今は基礎を上げなければ成らないのだ。能力の技術は…サムライやノーバディー達と戦って上げるしかないか。

いや、それにしても…。

カン!カン!シュツ!

当たらなさ過ぎる。

…最初は「父さん…戦えるの…?」と心配ばかりなのだったのだが。

「ほら、もう疲れたのか? だらしないなあ、ヴェン。」

『なんだよ、そっちが負けてる癖に!』と言い返したくなるような挑発だ。

——息子の挑発する親ってどうなの。

然し、男としてのプライド（笑）を守るため、せめて一発は!

「うおおおおお!」

俺は勇ましく、父に立ち向かっていった。

おれ、父さんを倒したら、サムライの所へ行くんだ。↑死亡フラグ

「いでで…」

結局あの後、俺は一本も：一発も当てられなかった。
身体、プライド共にズタズタだ、ちくしょー。

まあ良く考えてみれば、俺は前世で剣や刀を振るったこともなければ、木刀も振ったことも、剣道もやった事もない
ただの素人なのだが。

然し：素人といえば、原作の主人公も素人だし：ロクサスもどちらかといえば最初は素人だったはずだ。

——あれ、我流だよな。誰に鍛えて貰ったんだ…?

まあゲームの話なのだから仕方ないか、と適当に結論付ける。

「あら、お疲れ様、ヴェン。父さんは倒せた？」

「無理だった。…なんであんなに強いのか？父さん。」

一人黄昏ていると、先程まで刺繍をしていた母が話しかけてきた。そーなんですよ、たおせねーんですよ。それどころか、掠る事もないんですから。

——本当にN O . 2 の能力使おうかなー、腕だけ木刀やってみてーなー。

と不貞腐れていた俺に、母が慰めるように（笑）救済の言葉（？）を俺に言った。

「お父さん、実は？元？傭兵なのよ。…それもかなりの実力のね。」

えっ

…でしょーねー。

やけに戦闘なれってゆーか、動きが只のおっさんと違うと思ったわ。

「因みに無敗だった彼の記録に傷を付けたのは母さんだけどねー☆」

テヘツつとウィンクする母さん。

(^ ω ^) 。

知るか。

「そおおいつ！」

先ほどの鬱憤を晴らすかのように切りかかる俺。
何に切りかかってるか？

キンッ！

「……」

無論、そんな事を出来るのは父さんと…命の恩人^{サムライ}だけだ。
無言で、受け止める彼（性別不明、というかあんのか？）に心の中
で感謝する。

本当に心が無いんだろうか？というほど、人間らしい所がほんのたまにだが、見かける事がある。

さて、今俺は木刀でサムライに襲い掛かっているわけではない。
いや、襲い掛かっているのは襲い掛かっているのだが、武器が先ほどの金属音でもわかるように違う。

実際、俺が木刀で切りかかっても、掠った…というよりも空気を切るような。

兎に角、すり抜けるだけで振っても当たらないのだ。

次にサムライに木刀を持たせようとしたが――失敗。

持つことは出来るのに、振ろうとした瞬間に、するっ、とすべるように落ちたのだ。

ふーむ、「ノーバディ」に生半可な攻撃は通用しない、っていうのはわかってたが…基準はどうなんだろう。

何が透けて、何が当たるか。

何が持てず、何が持てるか。

――やはり謎だらけである。

…で、なんでそんな攻撃の入らないはずのサムライに攻撃が入ってるのかというと、持っている武器がサムライに通用するもの…ノーバディに通用するものだからだ。

『クリーパー』

ノーバディの一種である彼らは、体を変形させる事が出来るのが売りの、下級ノーバディである。

人型でないところを見ると「元の人間の心が普通より少し強かった」というぐらいだろう。

ゲーム内では雑魚キャラでもあったのだが、主人公が強すぎるのだ

から仕方がない。

俺は、この子はやれば出来る子だと思っている。

時に、潰れたスライムのように液体状になって進み。

時に、翼を生やして空を飛び。

時に、剣となって突如真上から奇襲してきたり。

：まあ、基本的には数で押す、ノーバディらしくない奴なのだが。

そう。サムライに切りかかった武器、こいつは「クリーパー」なのだ。

『同じノーバディーを通した攻撃ならどうなんだ？』
との、俺の安易な考えの元、実行されたわけである。

「来いッ！クリーパー！」

別にポケ○ンではない。

：ごほっ。

さっそく、である。

さて、「ノーバディー界で本来の目的以外で使用された」初めての被害者（サムライは含まない）

になるとは露知らず、ソイツはモノクロの茨を潜り抜けてどこことなく現れた。

その姿、兎に角平べったい。

ノーバディ類最小を誇り、小さすぎる腕（多分）に反して、足が体よりも大きい。

ペタ、ペタと歩く姿はキュートに見えそうで見えない。

——見た目がシャープだし…、夜は恐らく幽霊に間違えられそうだし…。

で、「剣に変形してくれ!」というお願いをして、現在、武器とさせてもらっているのである。

考えた通り、サムライにこの攻撃は通用したのである。

強度も申し分無く、…まあ少し重く感じるのだが、軽すぎても奇襲してもあまりダメージを与えられないか。

然しこの世界での…というか現実^{リアル}ノーバディは予想以上に強い。

…、単純に原作主人公が強すぎるだけか。

「……………」

その後、しばらくサムライと打ち合っていた俺だが、やはり一発も刀以外に触れず。

一瞬、武術の才能が零なのか、とブルーな気持ちから抜け出せなかったが、

『違う、二人が強すぎるだけなんだ。』という言い訳（割りと本当なのだが）するしかなかった。

気を取り直して。

正座をしてなにやら瞑想のような…ただそうしているだけであろうが…事をしているサムライと
剣から戻したクリーパーが虫を丸呑みにするのを横目に…ってちょっとまで。

「ノーバディーで食うのか!？」

クリーパーへ向けて叫んだが、首を傾げる（首はない）ような仕草をしただけで、またもや虫を探し始めた。

…あれ……そういうえば機関って何も食べてなかったんだろうか？

…だめだ、考えれば考える程想像つかねえ。

まあ、シーソル○アイスは食ってただけだな…でもまあ、不老なだけあって餓死はするんじゃないか…？

【運命を賭す者!】

さて、今回のお題は機関No. 10のルクソードさんの能力。

原作では、曲者ばかりの機関メンバー達の中で一番まともなのではないか?といわれるお方。

短く揃えた髪、蓄えられた髭など、いかにもギャンブラー好きって感じがする紳士である。

——というか、事実、生粋のギャンブラーなのだ。彼は。

武器からもそれが見て取れる。

彼の武器は「カード」。…実際これを見て何人かが、「えー、それって弱くね？」と考えただろう。

事実——：彼は戦闘をゲームと考えるタイプらしく…。

あまり、強くない（ぶっちゃけた）。

然し、少し不自然な所があるのだ。

本人の属性は「時」。彼の攻撃は、巨大化したカードを持つての連続攻撃、主人公をサイコロにしたり、カードにしたりする。

実際、「時」らしい攻撃が一つも無いのだ。

唯一、「時」らしい面が戦闘で出ているのは、戦闘ルール。

彼との戦いは、「時」賭けたバトルなのだ。

（戦闘時には画面上に主人公とルクソードの「時間ゲージ」が格闘ゲームのように表示される。

ゲージはダメージの蓄積や時間の経過により減少し、先にルクソードのゲージをゼロにすれば勝ちとなる。

バトル中は主人公をサイコロやカードに変化させたり、自身がカードに化けるなど、戦闘をゲーム感覚で楽しんでいるのが分かる。）

んで、今回はその隠れた…否、フェアプレー精神で本人が出さなかったと思いたい、その「時」の技

を解き明かすのだ。

「特に可笑しい所が見えない。ただのカードのようだ。」

い
ず
れ
か。

No. 3! 「鍛錬な一日」 (後書き)

因みに、この小説にアンチ要素は無い、と思いますし、それで行きたいです。

殺しとかも出来るだけ避けたいんだけど、戦争や戦闘が多いゼロ魔の世界ですし。

――…第二話で初っ端オークが死んでしまってますけど (苦笑)

まあ、のんびり行こうと思ってます。

No. 4! 「魔法使い」メイジ (前書き)

はい、若干投稿が遅れました。ごみなさい。

今回はヴェン君のテンションが高いです。

：まあ安定しないのは何時もだと思ってください (苦笑)

今回は魔法について。

No. 4! 「魔法使い」メイジ」

魔法。

それはファンタジーにおいて、最も重要な物の一つだ。
自由に空を舞い、火を起こし、水を生み出す…。

魔法を論理的に説明しろと言われれば自分には直ぐには思いつきそうにない。

だから不思議ファンタジーなんだろうけども。

「えくすぺくとばとろなーむ! …ごほん、ライト。」

「今の何のスペルなの?」

不思議そうに見てくる母。

…説明しないよ。某ポッター君について話ても分からないだろうから。

さて、御ふざけばかりで進歩が無いように見えただろ？

…はい、まったくそのとおりでござえやす。

杖契約に成功した後、なにやら熱い目頭を押さえながらサムライに報告したのはいい思い出。

クリーパー？ あいつはカエルを飲み込んでるところだったよ。

——慣れたよ。それが人間の…俺の売りだからさ。

「何遠い目してるのよ。ほら、もう一回。」

「ライト！ ライト！ ……光よ！」

コモンスペル唱えても何もおきねえんだもん。

仕方ないから三回目はヤケクソで「まほう」みたいな唱え方で。

パッ！

「えー…」

「やったわ！ 凄じやない！ こんなに早く取得出来たのってあの『烈風』以来じゃないかしら？」

なにやら俺よりハイテンションな母上。

俺としては、今までの「ライト」と喉を枯らすほど叫んだ努力やら、呆気無さやらで。

——というか、「光よ！」には突っ込まないンかい。

そんな「不思議」な魔法ではあるが、この世界ではなにやら。俺的考えで分けたら、四種類あるらしい。

一つ目、「コンスベル」

さっきのライトもコンスベルの一つで、杖先に光を灯す魔法だ。その他、ドアの開け閉め、ランプを灯したり消したり、等、生活向きの物もあれば、杖に魔法を纏わせて近接武器として扱うスペル等もある。初級魔法としてメイジは誰もがこれを最初に習うらしい。

二つ目、「系統魔法」

いよいよファンタジー。メイジ達の主力兵器。

「系統」の名の通り、火、水、土、風、という各系統がある。

それぞれ文字通り、火を起したり、水を操ったり。

違う系統同士を合わせる事によってさらに強化することもできるという優れもの。

三つ目、「失われた系統」

この世界に主人公が居るならなってそうな系統。ヒロインもありや。神祖ブリミルがそーだったといわれる、まあ、正式名称は「虚無」の系統だ。

最後に確認されたのが、三桁ぐらい離れた年らしく。…それで「失われた」と言われてるらしい。

一応、第五の系統とも言われる。

四つ目、「先住魔法」

これについては記述が少なかった。

まあ、それについては、分かっている事、という記述を見れば容易に想像できたが。

人間には仕えなかったり、詠唱が要らなかったり、魔法を反射したり。

兎に角、アンチメイジなのだ。そしてそれを使うのは亜人などしかない。

…まあ、俺も無詠唱の「まほう」ならあるけどな。…これも人前で使うのは得策じゃないかー。

正直、「まほう」が使える俺としては便利だなーっていう感じしかないのだが、

折角魔法世界に生まれたんだから、系統魔法ぐらいは扱いたい。

「凍てつく学求（Chilly Academic）」

所変わりいつもの森。

そろそろ名前でも考えてみようかとは思うが、残念だが俺にネーミングセンスなどありはしない。

さて、後半戦はおなじみ能力タイム。

一つ一つ、碌に開拓もせずに放置するものだから、マスターすべきものが増えすぎだ。

まあ、不老だから時間は生憎とたっぷりある。

No. IV ヴイクセン。

属性氷の機関内初の科学者である。

試す順番は決めているわけではなく、その日の考えで決めている。

今回は、「機関内でも魔法による攻撃を主力としたメンバーは？」という考えに基づいた。

該当メンバーは二人。

No. ?、No. ?、だ。

今回は？にしたが、？も近々試したいと思っている。

「…んむ、造りは頑丈だけど軽いな。まあ研究者でもあるし非力なものも考えて、だろうな。」

さっきから木に投げつけたり、足で踏みつけているが、掠り傷すら付かない。

サイズも一応それなりに大きいし…そうだ。

「スイツフイイイイイイ、あああああああ！！！？」

【放送事故が発生致しました。しばらくお待ちください。】

山の斜面を草スキー。

爽快に風を切り、勢いも増してきたその時。

…後はもうお分かりであろう。

草場が少ない上に無理してスピードなんてあげるもんだから、コーナリングを見事に突っ切ってしまったのである。

無茶しやがって。

幸いだったのは、コーナリングで脱落したところがわりと山の下部だった事と、その頑丈なシールドを手放さずに座っていた事だ。

だが。

無論無事では済まされるはずもなく。

「う…ぼう…え」

衝撃はすべて自分の下半身へ。

つまりは下品ではあるがケツが痛い。すげー痛い。

「氷よ！」

キンッ！

「うおー固まった。…ツメテッ！」

さて、しばらく痛さに悶絶していた俺だが、何とか復活。

早速「まほう」で属性でもある氷のブリザドで凍らせていた。

瞬間冷凍。

まさしくそう言えるほど、一瞬で丸太が餌食となった。

触れてみると、コンコン、と硬く、とても冷たい。…一応火力は抑えたつもりだけど、

FULLで放ったらドライアイスみたいになるんじゃないか？

「終われ」

さっ、と能力解除。

おー、まだ氷、残ってるね。

これはこれで便利である。主に食品保存に。

そんな事を考えつつ。

最近は何かと探求する事が多い。
俺の不思議ライフはまだ始まったばかりだ。

No. 4! 「魔法使い」メイジ」(後書き)

少々やってしまった感があるZE。

この後は生活環境について一話。
チート
追加要素話二話。

正直追加要素は決まっていますが、またキングダムハーツシリーズからになりそう。分からない読者にはご免なさい。

正直、今だに主人公が殺しを行うシーンが書けないです。↑ヘタレ抵抗が抜けきらないですね。がんばりたいです。

原作突入については上記三話が終った後次話になりそうです。

うーん：早すぎるかな、遅すぎるかな？

展開のもっていきかたが下手糞なのでw

誤字、認識の誤りなどがあればご報告ください。

では、これからよろしくお願いします。

No. 5! 「平民なる日常」 (前書き)

今回は一般生活の少し詳しく書いたver。

オリジナルのセンチエル家ですが、平民達との仲は割りと良好と
いうことに。

そして今回は……

No. 5! 「平民なる日常」

日常。

それは日々変わらない物で、幸せか不幸であったとしても同じだ。
幸福なものにとっては天国。
不幸なものにとっては地獄。

それは人によって違う。

だが、果てして狭間は…その二つの基準は？

「ふああああ…。」

起床。

平民の朝は早い。…貴族がどうなのかは不明だが。

まあ、なんか怠慢とした感じがするからそんな気がするが。↑偏見

季節は夏。明け方というのにセミが既に大合唱していた。

俺は寢床であるベットから立ち上がり、部屋を出る。

「お。おはよう、ヴェン。」

「あら、おはよう。」

「おはよー。」

寝起きなのでぼーっとした頭で両親に朝の挨拶を済ませると、外へ出てまっさきに顔洗いへ向かう。

ぱしゃっ

「つめてー。」

家の外にある井戸で顔を洗う。

水をくみ上げるのも意外と力が必要。これやってるだけでも力付くな。

バサッバサッ。

ア”ッー

「……。」

突然の羽ばたきの音と悲鳴を聞いて嬉しくないことに俺の意識は覚醒。

俺は無言で立ち去る。

——クリーパーが鳥を食べてたなんて言ってもだれもわかりはしないだろう。

最近アイツ、とことんギャグになってきているな、と思う反面、生態系とか大丈夫か？見つかったらどーすんだ？とかいう危機感が募っていた。

…後で無闇に生態系壊さないように命令しないとな…。

羽ばたいてゆっくり森へと戻っていくクリーパー見送った後、家に戻って朝食。

食材は主に収穫した野菜を煮込んだ物等、この世界では以外と贅沢なのかもしれない。

残念ながらお米がないのだが。

母に聞いても父に聞いても、「お米？なにそれおいしいの？」的な返事しか。

主食お米な俺にとっては辛い事。

農業の知識と経験があれば、是非とも農作したいものだが、生憎と稲刈りの経験しかない。

まあつまり…

「お米諦めろよ（＾ω＾）」ということだろう。

…今更遅いので置いといて。死刑宣告（大げさである）にも等しいからショックだけでも。

とはいっても、母の手料理は美味しいので余り困ってなかったりする。

「偉大なる始祖ブリミルよ…」

この変な御祈りさえなければ言うことは後はないのだが、
この世界の神話はどうなっているのだろう。ブリミルという奴は前
世で言う、キリストなのだろうか。
調べてみる価値はありそうだ。

「はっ！」

カン、と木刀と木刀がぶつかる音が整備されていない農道響いてい
る。

否、整備されてるんだけど、科学が全くといって発達していない
この時代、大分荒れている。

朝食を食べ終わると、父と鍛錬。

此処は以外と邪魔になりそうではあるが、以外と苦情は来ない。
それどころか、「見物させてもらってるよ」などという声が。

「ヴェンのお兄ちゃんががんばれー！」

「坊主、あぶねえ！」

「動きが良くなってきたな、兄ちゃん。流石レイグの旦那の息子だ
！」

な、わけで、周りにはいつの間にか人だかりが出来ているわけである。

俺がぼこぼこにされるところがどう白熱するのか分からないが、近所のおっちゃん共はなにやら興奮気味である。

から竹割りで切りかかってみるも、真面目な動きでは当たるわけもない。

「ほったってやあっ！」

薙ぎ払い返し、突き。

某緑勇者の剣技の真似である。

スッ、スッ、コン！

「なん…だ…と」

「スピードはいいね。でもまだ真直ぐすぎるかなっ！」

相変わらず余裕の表情。

アンタ何者だよ…畑仕事した後なのにそれとかねーわ！

カンカカンカン。

「ふっほっいえ！」

「ほーれほれほれほれ！」

俺だって伊達に鍛錬を続けているわけでもない。
父さん、サムライに鍛え続けられれば……！

容赦ない突きを繰り返す父の攻撃をサイドステップで避け、
振り抜きで腕を狙ったのだが。

ひょいつ、すかつ

「え」

「貰った！」

カンっ！

「いでっ！」

見事に空を切り、逆に木刀を叩き落とされてしまった。

結局その後は父がモンスター討伐に出かけるまで続けられた。

：相変わらず一勝も出来なかったが。

化け息子に勝る化け親父。：こりゃ早く追い抜きたいな。

父の仕事は傭兵兼農夫である。

といっても、主にモンスターを討伐して安全を守る、という事をしているのだが。

途中で胡散臭い武勇伝であったが、父の最盛期時代の話を聞かせてもらった。

暴れ狂った火竜を討伐したことがある、とかきかされても、ねえ。

（笑）

まあ実力も、最盛期じゃないにしろ相当あるということは分かっているのです、

なんとなく信じられない事も無い気はするが。

「あ、ヴェンにーちゃん！」

「お、ハティか。なにしてたんだ？」

目の前でペコリとお辞儀する藍色ショートヘアの子。
名はセンチユエル・リニール・ハティ。

そう、この子はこの地を収める貴族様の3人娘の一番上。
性格は男勝りの元気で、貴族らしい気品の無い、だけでもやさしい子だ。

よくお忍びというか、勝手に館を飛び出しては、平民の子供と混ざって遊んでいて、

分け隔て無く接してくれる為、周りの平民からも気に入られている。

今でも他の子どもと遊んでいたらしく、ニヘヘ、と笑うと子供たちの輪へ戻っていった。

年齢は俺と二歳差。顔立ちも将来は美人となるであろう綺麗な顔立ちをしている。

あ、リアル執事に連行されてる。

少年少女も必死に助けてる。愛されてるなあ。

因みに、連行しようとしているのはセンチユエル家に使っているエルドさん。

逃げ出す彼女を見つけては、勉強をしないハティを連行しているのだ。

それは彼女が輪に混ざって遊んでいる最中でもかまわず連行するものなので、少年少女たちには余り好かれていない。

「彼は苦労人だからなあ。ま、ハティのことを二番目に大切に思っているのは彼だろうしな。」

村人は苦笑しながらそれを見ている。

無論一番目は親である。それも親馬鹿なのだとかで、娘達に向ける愛は人一倍強いらしい。

——まあ、まだ若い（24）のに白髪が混じるのが地味に早いのは、確かに彼は苦労人なのだろう。

「お前なにしてんだよ」

いつものセンチエル森：名前が安価なのは気にしないでくれ。

それよりも。クリーパーに命令をしなければ、と思いつつ入った俺は。

鍛錬で切り開かれた広場の中央丸太でポーズを決めているサムライ。

…こいつをどう思う？

何処かで悪い物でも食ったのか、と一瞬思いつたが、あ、口ねえわと結論に至る。
今世紀最大の謎だ。

「——ハッスル。」

「え」

なにやら変な単語が聞こえた。

「（やべえ、俺疲れてんのか！？いくらなんでも元の世界が…日本が恋しいからって流石にこれはないぞ！？それともお米なのか！？お米を食べたいが故の錯乱なのか！？意味わからねえ、とりあいず……）」

「喋った！サムライが喋った！」

某ハイジのように叫んでおいた。

No. 5! 「平民なる日常」 (後書き)

というわけでなんともまあ、サムライ君が喋りました。

なんだかボケが欲しかったのと、後半戦が寂しかったので勢いあまって☆

にしても、原作はアニメしか見てないので、ゼロ魔の設定とかわからんのよ。

宜しければ、今後ともお願いします。

誤字、認識の間違えなどがあればご報告お願いします。

No. 6! 「覚悟」 (前書き)

今回は下手糞なシリアス。

実際考えている事としている事が矛盾した所が多く出てきそうではあります。

次回で平民少年編は終わりに…なるかなあ。

No. 6! 「覚悟」

「とうっ!」

どうやら幻影でも、疲れていたために聞いた幻聴でもないらしい。
正義のヒーローばかりにかっこ良く^{ばくてん}猓転を決めたサムライ。

——いや、俺の中のサムライのイメージが…。

「いや、願ってみるものでござるな! ヴェン殿。拙者のようなの
ーばでいでも願いたいというものは聞き遂げられるものとは! 拙者、感
動したでござる!」

「…えっと。どちら様?」

「のおおおっ!?!」

意気揚々と話しかけてきたサムライ(?)に現実を認めたくない俺は
思わずそう聞いてしまった。・・・にしても盛大なズッコケだな。

リアクションに俺が感心していると、サムライは立ち上がり、ぱっ
ぱっ、と土を払い。

「拙者は、サムライの中でも長き時主人(ヴェン殿)をお守りした
——」

「―鳶とんびと申しあげる！」

どうやらこのサムライ、名前まで持っていたようである。
一瞬某量産型の名前を言いそうで冷や冷やしていたが。

にしてもだ。

「なんで急に喋れるようになったんだよ!？」

残念ながら、俺は謎を自分でゆっくり解こうというタイプではない。
早急に今世紀最大の謎の答案を求めることにする。

――すると奴は目(?)を光らせ。

「よくぞ聞いてくれたでござる!それは昨日ヴェン殿が能力の実験
とやらを終えて、別れた後でござった!。」

「で、結論だけ聞こうか？」

「手厳しッ!…回想ぐらいいでござろう!？」

~~~~~

(サムライ視点)



「はあ…今日も対して調べられなかったな…。んじやな、サムライ」

「…。」

手をヒラヒラさせて言う主人を無言で見送るサムライ。

隣でまだなにやら咀嚼する音が聞こえていたが、特に目に留めることもなく、鍛錬を行なっている…

二匹はその広場へ足を進める。

パリッパリッ。

少々五月蠅いでござるよ。

そう二番目に主人に仕える事になった部下クリーパーに注意しようとしたが、

「……。」

出るのは沈黙だけである。

…もどかしい。然し、今に始まったことでもない。

過去にも、主人に言葉にして注意を促したかったあの時も。

刀でしか語る事ができないサムライには…辛い事であった。

心を少しとも手に入れる事ができたあの日からだ。

この気持ちに苛まれたのは…打ち上げる事のできない心の叫びばかりに悩まされるようになったのは。

『ちょっと…良いでしょうか？』



~~~~~

「えっと、ひょっとしてだが、その女の声の人って…。」

「主に『貴方を転生させた神様』って言えば解ると申されていたが…なるほど神様だったのでござるな。」

なんともまあ。

なにやら鳶に続きを促してみれば、第三の願いがカウントされなかったようだ。

うん、そーいえばノーバディって不老なんだよな。

んで変わりに送られた物といえば…。

何か見たことのある肩当。

「はて…?」

「?どうしたのでござるか?」

肩当…何か重要な事が思い出せそうだけでも…
まあ、良いか。

神様の事だから何時か必要になるんだろうし。

とまあ…。

「む、主人、」

「…ああ、わかってる…。」

エンカウント。

どうやら二人で騒いでいたせいで、敵さんと思われる者達を引き寄せてしまったようだ。

周囲でガサガサと音が聞こえる。

…数的には6匹。それに音がそれなりにデカイ。

（この足音は…又もやあの？おーく？なるものでござるか？）

ヒソヒソと俺に訪ねてくる鳶。

…いや、知らねえよ。俺だって聞きたいよ。

（そうなるど厄介だな…囲まれてるようだし…逃げるのは難しいな。）

切迫した殺気が立ち込める…冷や汗と共に未だに音を立てる周りの草むらを横目に、

この展開をどう切り抜けるか、という方法を詮索していた。

「（畜生…単純に切り抜けるだけなら増援を創ればいいんだけどな…。）」

同じく警戒しながら、何か思案している様子の鳶を横目に。

「（コイツ（鳶）らばかりに頼る訳にゃいかんしな…、）」

それに、増えれば隠すのも辛くなる。できれば危険は避けたい。

肩当は戦闘フラグだったか。

オークみたいな馬鹿力と接近戦は懸命ではない。ならば。

【凍てつく学究】

凍らせて一気に蹴りを付けるしかないのだろう。

ヴェンがシールドを構え、鳶が抜刀した。

「プギイイツ！」

それを開始とするかのように、一匹のオークが襲いかかる。

…ヴェンの予測は間違って居なかつたようだ。

「!…せいっ!」

瞬間、鳶の流れるような動きで懷に潜り込み、刀で貫いた。
急所を狙つての攻撃のようで…恐らく心臓かもしれない、オークは
痙攣した後、あっさり絶命した。

それを見て、やはりヴェンが口元を抑えて、顔を青くした。

「むぐ…「プギッ!」うおっ!」

「主人、危ないッ!」

二匹目がいつの間にか背後から混棒を降り下ろそうとしていた。
慌てて前に飛び込み前転で回避。慌てて行なつたから腰を打った。
痛い。

フリザド
「氷よ!」

「フギッい!?!」

突然現れた冷氣……そして、氷。

力加減が分からない。凍りついたのはオークの左足。

否…力加減が分からないんじゃない。「殺す」事に躊躇しているんだ。

「(ち、畜生!殺らなきゃこっちが殺られるってのに!)こ、氷よ

「！」

「グィエエッ！」

悪態を付いてもう一度冷気を放つ。

…だが、やはり力が制限され、右足を凍りつかせるだけだった。
しかし、これで一応動きをある程度封じる事はできた。武器を振り落としている。

「四刀流……霧雨キリサメッ！」

鳶といえば…鞘をも用いた四刀で霧のように二体目のオークを切り刻んでいる。

「（あれが…、さっきまで陽気に話してた奴…なのかよ…。）」

これが…戦い。

そして、更にオークの悲鳴が重なったかと思えば、戦闘していたのは、

あの、クリーパーだった。

「プギャアアアアー！」

ベチヨ。

水を叩きつけたような音がして、降りおろされた棍棒がクリーパーを押しつぶした。

…と思ったその時。

水銀のような光を反射した液体は、みるみる内に体を変形させ――。

「プギ――」

槍となって、オークに突き刺さった。

左胸に刺さっているようで、悶えるオーク。

銀色の槍はまた変形を初め、先端の部分が長い鋏。

そして。再びオークの体を貫いた。

あっという間に三匹のオークを絶命させた鳶とクリーパー。

あれだけ至近距離で確実に血が多く流れるような殺し方をしたというのに…。

――全く血がついていない。

否、表面に赤い部分があるのだが、その血は、まるで防水加工された布…傘にかかる水のように

地面へ滑り落ちていく。

これが…殺戮…否、戦闘。

初めてこの世界でオークが死ぬ所を見たと言うのに、トラックに轢かれた時だって見たのに。

血、死、死体を見ると、膝が震える。

すぐに逃げ出してしまいたい。

目を閉じて、現実逃避したい。気絶したい。

でも、死にたくない。

そう、生き残る事に決心した俺はー。

両足を氷漬けにされながらも、また武器を拾い上げ、構えるオークに対して。

「ごめん」

「氷よ！」

止めを、刺した。

この世界は前世のように平和に暮らせる世界じゃない。
平和ボケしたまま、生涯を終えられるような所じゃない。

俺は初めて殺した―目の前の完全に冷凍されたオークを目の前に、

ただ、静かに涙を流していた。

N o. 6! 「覚悟」 (後書き)

ノーバディー達は無双。

正直主人公戦わなくて良いんじゃないかってぐらいでござる。

まあ、ただ部下に任せっきりの上司ヴェンにはならないようにしますけど！

先頭描写難しい。

誤字、認識の誤りがあればご報告くださいませ。

N o. 6. 5! 「夢」 (前書き)

迷走。

そして量は薄め。

No. 6. 5! 「夢」

あの後、目眩がするやら、吐き気が来るやらで、両親を心配させてしまった。

俺が止めを刺したのは、一匹。

残りの5匹は、鳶とクリーパーが仕留めた。

はたから見れば、たった一匹である。…自分からすれば一匹でも…だけでも。

遺体は全て土に埋めた。…体の大きさが大きいだけに大変だったのだが…。

「……。」

二つの月に照らされる部屋の中、俺はベットで寝転んでいた。眠れない。まだ、全身が痛い。

——俺も何時かはあの事（殺し）にも慣れてしまうのだろうか。

そんな考えが脳裏をよぎり、「そんな訳がない」と頭を振って否定する。

人は良くも悪くも、「慣れて」しましやすい。

もしそうになったら、と思うだけで背筋が冷やりとする。

繰り返される自負の念に疲れ、俺が寝ついたのは、長らく時間がたったあとだった。

「あ…れ…?」

俺が目を覚ましたのは、ベットのの上ではなく、乾いた砂の上だった。周りは暗く、余り見通しが良くない。

ザザアア、ザアアア。

不意に波の音が聞こえたので、そちらに目を向けると。

元の世界と同じような、一つの月と海。
照らし出された暗闇の世界だった。

ふと、目を凝らしてみると、誰かが岩の上に座っているようだった。一瞬、俺は元の世界の夢でも見ているのかと思ったが、生憎とこんな光景は見たことはない。
それに――。

目の前の?黒いフードの男?でここが何処が分かったところだった。

「…こんな所に客とは珍しい。」

見たことがある。

俺が前世で死んだ時も、今世の今でも正体が解らない、あの人物が居た。

「貴方は…？」

「ふむ。君は正式な客では無いようだな…。不思議な事もあるものだ。」

一人何かを分かったかのように言う彼。

正式な客というのはなんなのだろう。

というかスルーかいな。

「君はとても似ているな…。今では名前を忘れてしまったが…。」

「失礼、私に解る程度の事を説明しよう。…君は夢を見ている。」

夢？

…痛くない。頬を抓ってもなにも感じない。

うん、そうなのか。

「君が此処に来た理由は解らないが…、この…済まない、名前を忘

れていてな。」

彼は若干申し訳なさそうに言うと、

「君は答えを求めているようだな」

ずばり、俺の欲しかった事を言い当てた。

…夢だから、という事にしておこう。

「…どうだろうな。答えは私には答えられないかもしれない。」

…そうなのかあ。

まあ確かに、急に「殺しについて貴方はどう思う？」なんて聞かれてもな。

というか、「死」っていう概念が無い所で生きてるからね…。

「只、殺しという行為に正当さや正義はない…ということだな。」

…？

「殺しが全て罪というのは…無論例外もある。」

例外？

「肉だ。人は肉を食べる為に生き物を殺すだろう。」

ああ、そうか。

「君は一度も蟻を踏み潰した事は無い、と言えるか？」

それは、言えない。

「逃げるようではあるが…、自己満足や無意味な殺しを避けられ良いのではないか？」

「気に病むなどと言わない。時には守る為に奪わなければ成らない事もあるからな。」

「…その能力チカラをどう使う？」

この能力チカラを…？

「以外と答えは簡単な物だ。
まあ、力が無い物にすれば、
？成し遂げる？事は実に難しい事では

ある。」

「だが、お前には強い能力がある。」

…そうなのか。

命を奪わないで済む方法…否、命を奪う必要性を発生させないようにする為に。

「答えは見つかったかね？…くれぐれも間違った選択をしないようにな。」

ああ、有難う。

探してみるよ。

最後に波の流れる音が聞こえ、俺の意識は薄れていった。

No. 6. 5! 「夢」 (後書き)

頭の中が混乱中。

？彼？が誰なのかは、原作でも不明です。

どうして夢で彼を出そうと思ったのか、作者でも分かりませんw

次回では漸く旅へと。

次回でようやく原作メンバーと出会い。

No. 7! 「旅立ち」 (前書き)

ふえーい、更新が遅れました御免なさい。

今回はついに、原作メンバーと出会う：瞬間手前までどうぞ。

No. 7! 「旅立ち」

とある日の昼頃。

待ってましたとばかりに手を振り上げ。

「キイイイイイイイイイイグウウウウウ」

サッ

「クイイイイイイムウウウ」

サッ

「ゾおお「やらせねーよ!」手厳しッ!？」

鳶^{アホ}の頭を殴って止めさせた。
ごほん…行き成り冒頭で悪いな。

あれから10年。

10年間ですっかり背も伸び色々変わってしまった俺だ。ヴェンだ。鳶が冒頭で叫んでいた（未遂に終わったが）通り、キング・クリムゾンだが許してくれ。

…この10年間。長かった。

否、実際終えてみると、案外早かったなーって感じではあるのだが、修業中は大変だった。

まあ、結局、村に任された仕事をこなしたり、使う余地があるかどうか怪しい系統魔法の訓練をしたり。

どうやら適正は風にあったようで、それなりに強い突風を起こすことが出来た。

——ランク？ かどうか解らないが、母によると「ライン」程度らしい。

因みに他の魔法については、同じくらい「火」があるぐらいだった。

…どちらも「まほう」に負けているから、はっきりといって微妙だけれども。

でもまあ、上位になると分身を作り出せるらしい。

単純に分身といえ、できなくもないのだが、俺の分身はダメージを受けると俺も受けた事になる。
しかし、風のスクウェアスペルの分身は…某忍者漫画の影分身のようなものらしい。

辿り着くには高い壁があるけども。

………

「ヴェン、それは考えて決めた事なのか？」

「そうよ。そこだけはハッキリとなさい。」

昼の食卓。

飯を食べ終え、俺はある決意を両親に話す事にした。

この世界での成人が今一解らないのだが、俺はもう20なのだ。（

前世合計38。）

そろそろ見られる物を見たくて旅に出たいと思っていた。

のんびり平和に暮らしたいとは思わない事はないが、
やっぱり異世界なのだ、冒険しなきゃ損だよなあ。

んで、俺が、

「色々知りたい事、やりたいことが在るんだ。だから…旅に出ていか？」

そんな事を告げると、先程の両親の再問。

俺はゆっくり頷いて、

「ああ。それが俺の願いだから。」

「「……………」」

俺が割化し緊張しているが、堂々と言い切った後、
両親は二人とも思案顔になって唸っていた。

——そして痺れを切らしそうになった時。

「…わかった。なら、？あれ？を持っていきなさい。」

親父は重々しく頷くと、自室へ歩いていき。

——程なくして、大振りの剣を持ってきた。

その剣は一般世間でいう大剣：もしくは両手剣と呼ばれる大きさ。
No. 7でいう？クレイモア？より大きめで、片手で振るうのには
難がある。

ロングソードか。

鞘のカラーは薄い緑で、長年愛用されていたと思われるような傷が
あちこちについている。

しかし、錆びが少しもない所を見ると、良く手入れされているようだ。

——いや、基準はわからないけどね？

「父さんが母さんと結婚する前まで……傭兵時代の時愛用してた剣だ。」

おお…それは年季が感じられる訳だ。

って、結婚するまで？したあとは何使ってたんだ？モンスター討伐とか…

…まあ、いいか。

「父さんにはもう使う機会が無いかもしれないから…。ああ、後碓石もだ。手入れはちゃんとするんだぞ？」

ずしり。

おお、思ったより少したが、軽い。

「あら…その剣を見ると思いだすわねほら、あの時の……」

なにやら昔話を始めた二人。

なんだかんだで、夫婦水入らずの生活でも送りたかったのではないだろうか。

二人とも見た目こそまだ若いが、年は確実にとっている。

——俺はここから死ぬまで姿に変化は無いんだけどな。

ちょっと寂しくなった俺だった。

・
・
・
・
・
・
・

「ほほおー、主人のお父上の愛剣でござるか…。」

「ああ、傭兵時代から使ってたらしい。」

所変わり森の中。

数の増えた丸太の上に、俺と鳶は座って会話していた。

此処も変わった物だ。

…少なくとも良い意味では無い。残念ながら。

広場のスペースは何倍かに広がり、地面が抉れている所、隆起している所。

大惨事である。

「それにしても良く見つからなかったよなあ、ほんと…」

「？」

「いあ、なんでも。」

どうしたでござるか？

と言わんばかりにしみじみ修行の日々を思い出す俺に疑問符を浮かべている鳶。

「んで、その剣って凄いのか？」

「大した業物でござるな。これを作った匠に御会いしたい。主でも解る通り、結構な年季物。」

お父上も手入れ怠っていなかったのでござろうなあ。」

べた褒め。

というか鳶よ、お前自分の愛刀しか使わんだろ、なんで詳しいんだ？

「拙者としてサムライである前に一人の剣士でござるよ！」

だそうだ。俺にも解る日がくるんだろーか。

：能天気な癖して割りと博識なんだよな、コイツ。

と、

ペタリペタリ。

独特な足音と共にクリーパーがどこからともなく歩いて来た。

「お、ちゃんと来たな。って何銜えてんだ？」

クリーパーを掴んで目の前まで持ち上げる。

あからさまに毒毒しい色のキノコを銜えていた。

ああ、これは…。

「…クリーパー、エゾテングダケ（毒キノコ）をキャプチャーしたみたいだな。」

否、実際この世界にはない。ただ、一応毒キノコではある。それも人を致死させる程の奴。

ただ、直感的に言いたくなっただけだ。気にしないでくれ。

——まあ、大丈夫だろうからジタバタし始めたクリーパーを降ろしてやる。

「所で主、何時出発するのでござる？」

「主じゃなくてヴェンって呼んでくれよ……明日の朝。」

「ムシヤムシヤ」

「明日の朝でござるか…、拙者達は？アレ？の中でござるか？」

「うんむ。」

説明しよう！

？アレ？とはNo. 10「ルクソード」武器であるカードの事である！

自分がカードに入り込んだり、カードに相手を閉じ込めたりとして
いる所からヒントを得て、

「これなにか保管したり保存したい時に役に立つんじゃない？」とい
う考えに至り。

結果、見事に対象を保管させる事に成功した。

一枚につき一つしか物を入れられないのだが、カードの数は無限に
ある。

出そうと思えばポンポンでるのだ。

ただ、事実物をコンパクトに保管するだけなので某猫型ロボットの
四次元ポケットより不便だ。

まあ、その代わりなんと、カードの時を操れるようなので、食材等
も保管できる。

因みに中の物を取り出す方法としては、俺が解除するしか無い。

とまあ、これに鳶達をバレずに運ぶ事が出来るわけである。

ただ、如何せん中は何もないから暇らしい。俺はまだ入ったことないからしらが。

主にそれが鳶の不服らしい。

「拙者が自由に表を歩けるのは何時になるのでござるかなあ。」

「…ん。善処するさ。」

何時かはそんな場所を作りたいと思う。

前にも言ったであろうが、時間はあるのだ、のんびりでも確実に探せる筈だ。

【運命を賭す者】

称号を唱え、カードを創り出す。

表まっさらなカードが二枚出たのを確認して、

「んじゃ。」

「御意。早く出られる事を期待するでござる。」

パアアツ

光と共に鳶の姿が消え、カードにサムライが描かれる。
それを確認すると。

「次はクリーパーと…こら、逃げるな。」

毒キノコを食したクリーパーは再び歩きだし何処かに行こうとしていたので、
むんずと両手で捕まえてから、ジタバタするクリーパーを同じようにカードに保管した。

二枚のカードが無事保管されたのを再び確認して、布のバックに入る。

「……。」

長年お世話になったセンチエル森に静かに俺はお辞儀すると、
剣を背負い治してから。

背を向けて村へと戻るべく足を踏み出した。

・
・
・
・
・
・

「明日から旅に出るんだと？そりゃあ寂しくなるなあ。」

長い間お世話になった、大工のラトクさん。

この人には折れた鍬などの修理なのでお世話を掛けた。

鍛錬ギャラリーの一人で、気前の良い親父だ。

「はい。そろそろ、その時だと思ひまして」

「堅苦しい話し方は止めろよ。…ふむ、確かに思えばお前も随分で

かくなつたもんだな。」

餓鬼の頃なんて、嵐が吹けば吹き飛ばすようなチビだったのにな、と懐かしそうに言うラトクさん。

そりゃ、20にもなれば昔のヒョロとした所も無くなるだろう。

「何時ぐらい戻ってくるんだ？」

「そうですね：じゃなくて、そうだなあ、何時になるかはわからないな」

見るもの見てからじゃ遅いかもなあ…。

ラトクの親父も、元気とはいえ歳でもある。

もしかすれば、王都か何処かで職に就くかもしれない。：というか就くだろう。

「まあ、報告には戻ってくるよ。」

「ああ、忘れるんじゃないぞ。…それじゃあ、俺は仕事がある。」

「わかった。仕事、頑張って」

言われなくとも、とばかりに鼻を鳴らして作業場へと戻っていくラ
トク。

さて次は……。

んー、ハティはいま魔法学院に居るんだっけか。
なら挨拶出来ないな。残念だ。

「えー兄ちゃんどっかいつちゃうのー？」

「何時戻ってくるのかしら？」

「へえー兄ちゃんもついに出るのか。」

村の少年少女。

よく昔話を聞かせて貰ったお婆ちゃん。

先程のラトクの親父の弟子さん。

村人に挨拶を済ませて行く。

途中、子供達と遊んであげたり、家へ招いてもらったり。

そして、日は落ちて、夜。

「答え…見つかるかなあ。」

俺は朝早く村を出る為、早く寝付く事にした。
ぼそりと今回の旅の目的の一つに対する不安を呟いたのだった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「ご馳走様」

朝。

若干息子の旅立ちを祝ってか、豪華な朝食を食べ終えた俺は、自室から、カード等、色々入ったバックと、着替えを肩から掛け、譲り受けた剣を背負い外に出る。

黒いフード付きローブを着込む。以外とお気に入りである。

今日は幸いな事に天気だ。

旅立ちが雨だとか、正先が悪すぎる。

「荷物は持った？忘れ物してないかしら？」

「大丈夫だよ母さん。ヴェンだってもう大人だ。」

「はは…、そうだよ母さん。」

まあ確かに、遠足等とは違うのだ、忘れ物はしたくない。もう一度荷物を確認してから、

道中にある森を進んでいたら、行き成り雨が降り出したのだ。

ついていないいな、と内心思いつつ、雨宿りする場所は無いかと、木の下を走りながら探すこと暫く。

「…小屋か。彼処で雨宿りさせて貰うか…。」

コンコン

「すみません、誰かいませんか？雨宿りさせて貰いたいのですが…。」

「

反応がない。

人気もしないし、ひよっとしたら留守にしているのかもしれない。

周りを見渡しても、同じような小屋は見えない。

…仕方がない。

「失礼しますよっと……うお…クモの巣貼ってる…。」

どうやら長い間人に利用されていないであろう事を示すように、埃とクモの巣だらけだった。

一応、毛布が敷かれた同じく埃を被ったベット、椅子、テーブル等がある。

汚いけど、我侭は言えないし、これでもマシなほうかな、と思いつつ。

「えー…今頃雨止むなよな…もう」

外を見てみれば、先程の雨は何処へ、また晴れていた。

若干その事に愚痴りつつ、まあ、休憩でもしているか。と思い埃とクモの巣を払って椅子に座る。

荷物は床に置いて置く。

「ん?」

ふと、埃だらけの光景に見合わないような真新しい箱があった。箱といっても長方形というか？長いものだ。

近づいて開けてみる。

「えええっ!？」

まさかである。

この世界でけして、科学の発達していないこの世界で見る事になるとは思わなかった物をここで見る事になるとは。…それにしても何故これが？

「ロケット弾だなんて物騒なもんを…。」

筒丈に折りたたまれたそれは、まさしく対戦車用ロケットランチャーだ。

えーつと…「M72 LAW」？詳しくは知らないけど、たしかM^{メタル}ギアソリッドGSで出てきたよな。

然し、誰がこんな物を――。

再び箱にM72を直すと、椅子に座って思案する。

その時だった。

ドアが静かに開き……。

「「！」」

今、運命の歯車が、回り始めた。

No. 7! 「旅立ち」 (後書き)

てなかんじで第七話。

時間を掛けた割には、話が進んでいないという事実。

……文才が欲しい。

原作メンバーとの出会いはフーケ編から。

なんか結構無理やり臭いですが（へへ、；）

「破壊の杖」のは合ってますかね？

一応wikiで調べはしたんですが。

さあーって…次回は難しい戦闘描写…。

誤字、認識の間違い等あれば、ご報告くださいませ。

No. 8! 「vsゴーレム」 (前書き)

戦闘描写。

というか、更新が遅くなりました、すいません。

保存するの忘れてデータが一度吹っ飛びました(汗)

今回はノーバディ達は出ません。

No. 8! 「vsゴーレム」

「「!」」

俺が出会ったのは、図体が熊のような、気前の良さそうなおっさんでもなく、

威張りくさったような、偉そうな貴族の男でもなく。

青髪の小柄な少女だった。

マントや杖を見る限り貴族だが。

「っ…黒いローブ…」

俺を見た途端警戒して、杖を構える少女。

あちゃー…この子が所有…というか関係してる貴族なのかも…

「わ、悪い。雨が急降ってきた物で…雨宿りしてたんだ。」

「……。」

俺が慌てて理由を説明するが、未だに表情を変えず、警戒する彼女。な、何かりアクションが貰えないと辛いな…。

「ねえ、何か見つけたの、タバサ…って黒いローブ！」

「……まって」

「なにしてるのよタバサ。黒いローブの男って正にこの男じゃないの！」

「フーケ？俺の名前はフーケじゃない、というか誰だそれ。」

俺の言葉に、後から入ってきた赤い髪の少女…恐らく青い髪の毛の子と仲間なのだろう。

も、怪訝そうな目で俺を見てくる。

「貴方本当にフーケじゃないのかしら？…つくならもっとマシな嘘を付きなさいよ。」

「いや、バレたかあ、ってそうじゃなくて！俺はフーケじゃねっての！ヴェンっていう名前があんだよ！」

「へえ、んじゃヴェンさん。本物のフーケは見たかしら？」

知らない知らない。
というか、

「フーケって誰？」

俺の質問に、彼女達は目を見合わせると小さな声で、

「……嘘は言っていないみたい」

「本当に何も知らないのね…、」

そこで漸く警戒の色が薄れる二人。

「ん…自己紹介させていただくわね。私の名前はキュルケ…長いからキュルケでいいわ、
なかなかカッコイイ平民さん。」

「…タバサ。」

「あ、ああ。ありがとう。…改めて、旅をしてる。ヴェンだ。」

どうやら威張りくさった貴族様…ではないらしい。
まあ、それでもまだ見下した感はあるが。

——まあ仕方ないか。

「んで、答えてくれなかったらそれで良いんだが…？フーケ？って誰だよ？」

「貴方まだ街に行っていないの？」「ああ。」…なら仕方ないわね。」

なんだかんだで教えてくれるらしい。

「フーケってのは、ここ最近…というか暫くだけと貴族の間で噂になってる大泥棒の事よ。」

「大泥棒ね…」

「優秀な土のメイジで、二つ名は？土くれ？…ゴーレムの大きさからして、トライアングル…くらいかしら。」

トライアングルか…といっても実際に見てみなきゃどれだけ凄いのかも想像つかないな…。

「なるほど…で、なんで君たちは俺の事をフーケと？」

「まあ…いろいろあって私たちもソイツに盗まれてるのよ。それで、私たちは協力してフーケを捕まえる事になって、」

「うちの仲間の子がなんだけど、フーケが物を盗む際にその姿を目撃してるらしいのよ。」

「…それが黒ローブの男」

なるほど…、

「情報では、この小屋を拠点に使ってる、っていうのだったけど…

この様子じゃハズレみたいね。」

偶然、黒コートを着て、この小屋に居た、という事から疑われたわけか…。

なんつーか俺、不幸だな。

「さ、行きましょう、タバサ。ダーリンにも報告しなきゃ。」

「…（コクリ）」

「さようなら、平民さん。」

「ああ。」

と、二人が出ていこうとした時。

ゴゴゴゴゴゴ

「なっ、地震…!?!」

『きゃあああああああ』

「っ、この声はヴァリエール！タバサ！」

「……フーケのゴーレム」

「ここが拠点だってことはアタリみたいだったわね…、杖をもってない…貴方は違うみたいね。」

二人の後を追ひ、外に出ると、そこにはそびえ立つ巨大な土のゴーレムが。

「でけえ…。」

少なくとも、オーク鬼は軽くある。

これが、トライアングルクラスの實力か…と感心。

「…（呪文詠唱の声）」

タバサは既に詠唱を開始、杖を前に出すと、

「トルネード」

ヒュゴオオオ！

竜巻を発生させ、放つ。

強風か、真っ直ぐ、ゴーレムに吸い込まれるように当たる。中々の強風だ、流石に、機関メンバーのほうには負けるが、高いクラスであることは間違いない。

だが。

目立った傷一つ付いていない様子を見ると、ゴーレム（相手）のほうが強かった。

「（風じゃ分が悪いとは云え…強度は凄いな）」

「私も行くわよ！…ファイアボール！」

次はキュルケがスペルを唱え、大きな火の玉を作り出す。こちらの中々大きい。これならダメージが…

メラメラ、と着弾したゴーレムの表面を焼くが、

ブウウン！

ゴーレムの一払いで鎮火。焦げたぐらいで目立ったダメージにはなっていない。

「ッ…あのゴーレム、中々ね…。」

これにキュルケが舌打ちする。

中々所か、大分だと思うんだが。

ゴーレムのすぐ近くにいる、ヴァリエール嬢の姿を見て、

「（俺が動いたほうがいいのか？）」

然し、ノーバディー達と同じで、人前では封印している能力。

…え？このままで（能力未使用）いけて？

このままであのゴーレムに勝てるほど、化け物にやなっちゃいないぞ。うん。

たしかに、血を吐くような訓練はしたが、飽くまで一般人より強いって程度だ。

そこへ能力使用によるステータスが+される、ということだ。

それに不老なだけであって、消して不死身ではない。

場合によっちゃ、食中毒で死ぬこともある。

——ただまあ：死んだ事ないから解らんけど。

「タバサ、シルフィードを呼んで頂戴！」

「∴（コクリ）」

「（黙って見捨てるほど、俺は落ちぶれちゃいないしな…）」
【静かなる豪傑】

今回はN.O. 5「レクセウス」を選択する事に。

実際、まだ他に選択はあったんじゃないかと思うだろうが、

まあリスクを少なくするなら、これが良いんじゃないかと。

一回の戦闘で一回までしか能力使用が出来ない、なんて事はないかな。

と、今にもヴァリエール嬢迫るゴーレムを止めようと歩を進めようとしたその時。

あの科学兵器ミサイルランチャーと同様、見ることになるとは思わなかった物を見る。

「ルイズっ！」

黒髪の少年。

そして服装といえば、現代的な物。

背中に錆びた長剣を背負っている事を除けば、何処にでもいるような高校生に見える。

「（…でもなんでそんな人物が？）」

……

「（まあいいか。聞いてみりゃ解る事だし…）」

と、なにやら、揉めている二人。

否、そこ危ないから！さっさと逃げようよ！

何やら「貴族だから逃げる訳には行かない」等と聞こえたり
乾いた音がしたと思ったら、少年がヴァリエール嬢の頬を平手うち
してたり

「お前ら逃げろおおおおおおお！」

「「え？」」

二人に迫るゴーレムの拳。

なんとか間に合う。二人を押しのける。

次の瞬間、ものっそい重量が体に襲いかかる。

「ぐあっ……ふんぬううう！」

一瞬意識が飛びかけたが……
というか飛かけるだけで済んで良かった。

怪力は怪力といっても、見事にスプラッタになる可能性がある。

——まあ、賭けに近い。

「うおらっ！」

掛け声が余裕そう、だって？

ノンノン。むっちゃ辛いです、全身、特に足と腕が悲鳴上げてます。なんとか、ゴーレムとの力の競い合いに勝ち、押し返す事が出来た。

然もよろけてくれている。

真逆、人間に返されるとは思わなかっただろうな。

無論、隙を見逃す気はない。

俺自身もよろけながらだが、アックスソードを召喚して。

「土よ！（クエイク）」

アックスソードで地面を叩き付ける。

クエイクというのは、地面を隆起させて串刺し、もしくは敵を打ち上げる「まほう」。

発動には地面に何らかの？衝撃？を与える必要がある。

敵を単体で狙って隆起させる事は勿論、直線上に連続で隆起させるタイプが。

今回は、ゴーレムの足を隆起させた土で貫き、バランスを崩させるのが目的なので狙い型。

「せやっ！」

ガキッ、ズゴォン！

狙い通り、クエイクのまほうはゴーレムの片足にHIT。
あの大きい図体ならば、片足だけでは支えられない筈だ。

だが。

それは、ゴーレムが再生しなかったら、の話だ。

ズズズッ、と折れた片足が猛スピードで隆起した土も呑み込み、元通りに。

「ちくせう！（畜生）フーケのゴーレムは化け物か！」

「ちょっと、貴方…なにものなのよ？す、素手でゴーレムの腕止めたり…」

「質問は後にももらえると有難い！あの二人を！」

「え、ええ。貴方は大丈夫なの？倒す手立てはお有りかしら？」

「大丈夫だ、問題ない。…と言いたいけどな。取り合えず時間は稼ぐ。さあ行ってくれ！」

話している内にも、着々と力が上がっていくのが解る。

上昇の基準が、通常verなのかリミットカットverなのかは解らないが、…比べようがないからな。

ただ、気力の上がり下がりによって出来る事も変わるから制御は繊細で他のメンバー同様これも難しい。

キュルケが二人を、特に、「貴族の誇り」がどうか言ってるヴァリエール嬢を連れて何処かへ行くのを

見送ったあと、完全に片足を取り戻したゴーレムへと向かい合う。

パンパン、と手を払って。

「てめえは奴らを殺したいだろうが…悪いがこっから先は一方通行だあ！」

どやあ…

Side キュルケ

「ここまで来れば大丈夫ね…あの平民さん大丈夫かしら…？」

「今すぐにも引き返すわよ！フーケを捕まえなきゃ…後、あの意味不明な平民の事も調べなきゃ！」

「あつ、ルイズッ！ごめんキュルケ、直ぐ彼奴連れ戻してくるから！」

「またもや懲りずに元の道を引き返していくルイズ。」

「ダーリンは連れ戻す為に追いかけて…って態々二人をここまで連れてきた意味ないじゃない！」

「私はため息を付いて、二人を追いかける。」

「ごめんなさいね、平民さん。貴方の努力、無駄になりそうだわ。」

Side ヴェン

「うおおおおお！」

雄叫び。

そしてオーラの量は更に増え、暑苦しさすら感じる程に。

まだスーパーサイヤ人ほどは出ていないが。

ガゴッ！

先ほどよりも軽くなったフットワークと、アックスソードでの一閃で腕を叩き切る。

尚も再生を繰り返すゴーレムだったが、段々と遅くなってきた気がする。

「（まったく…このままゴーレムを倒せるのは目に見えてるが・・・その後が面倒だな。）」

時間が経つごとに脆くなるゴーレムと、時間が経つごとに強くなる俺。

言わずとも勝敗は決まったようなものだが。

「（フーケの野郎を取っちめないといけないしな…捕まえられるか心配だ…。）」

「覚悟しなさいっフーケ！」

「っなあ!?!」

突如、後ろから物凄い音と共に衝撃を受け、俺が吹き飛ぶ。
まさか、フーケか！？否、でもさっきの声は：

体制を立て直し、目を向けた先には、ヴァリエール嬢の姿が。

「おい、ルイズ！なんであの人を攻撃したんだよ！」

「ち、違うわよ！ゴーレムを狙おうとしたら、何故かそこが爆発しちゃって！」

なん…だと…。

今のは爆破ミスだったのか！あぶねえ、まじあぶねえ。

狙いがもしも俺の体内だったら、汚ねえ花火になるところだったぞ！

おそろべし！爆発少女ヴァリエール！

…って、そんな事考えてる場合じゃなくて。

「そおおうい！」

迫る拳を切り捨てる。

奥義で葬りさってもいいが、残念ながら未完成だ。

…あ、そーだ。

「少年！取ってきて欲しい物がある！」

「な、なんだ?!」

「小屋があるだろ? フーケの拠点とか言われてる場所。其処にミサイランチャーがあるはずだ。」

「なっ、ミサイランチャー?!」

「ああ、時間は問題なく稼げるが早急に決めたほうがいい。いそいでくれ! 長方形の箱にはいつてる!」

「任せろ!」

「ちよちよっと! サイトは私の使い魔なのよ、そんな勝手なこと…」

「悪い、嬢ちゃん! これもフーケを捕まえる為だ、分かってくれるな?」

やっぱり知ってたか。現代的な装いと言い、そうじゃないかと思っ

た。小屋へ走り出した少年…もといサイト。ヴァリエール嬢はそれを見て講義の声を上げる。

俺の答えに渋々だが納得してくれたようだ。

「(フーケの搜索を頼もうと思ったが…プライドが高いみたいだな。)

恐らく彼女は俺の指示を受けてくれないだろう。
予想ではあるが間違ってる気はしない。

再生を終えて、俺を攻撃しても一向にダメージが与えられない事に
遅くながら学習したようで、ターゲットをヴァリエール嬢に移した
ようだ。

ズシンズシン、と土煙を上げて歩き、拳を振りかぶる。

「きゃあ!？」

「させるか!土よ(クエイク)!」

足をクエイクで碎いて、拳をアックスソードを投げて切る。

回収しなければ素手だが、時間も時間だ、今なら素手でも互角以上
に戦えそうだ。

森のほうへ飛んで行くアックスソードを見ながら、仕方なしと拳を
握る。

と、その時、俺のほうにも遂に救世主が。

「持ってきた!一応、俺使えるみたいだから、俺が狙っていいか!
?」

「え…?君はソイツ(ミサイルランチャー)使えるのか!？」

「多分、俺のルーンが関係してると思うんだけど…」

いろいろと聞きたい事はあるが。

俺も使ったことは無い。というか前世で持てる訳ないよそんなもん。まあ好都合だ。使える奴が使ったほうがいい。

「わかった！一発お見舞いしてやれ！」

「おう！」

ルーンの力がどうか言うのだが…スムーズに展開を終えた所を見ると問題ないようだ。

にしても、俺たち初対面だよな…？

「くらえ！」

そして、サイトの持つ対戦者用ミサイルランチャーが。

バシユッ！

音を経て射出された。

そして、化学兵器はゴーレムへと着弾し。

ドカアアアアアアアアアアアン！

上半身を木っ端微塵に粉碎した。

残った部分もボロボロと崩れ落ちていく。

「やったわ！」

「ああ、フーケのゴーレムを倒した！」

動かなくなったのを確認して二人が喜びあっている。

俺は能力解除して、ふう…とひとまずの仕事を終えて座り込む。

まだ「フーケの捕獲」という詰めが残っているが…奴は恐らく精神力の消耗のしすぎで、今頃疲れ果てているだろう。

それに、恐らく逃げる体力は残してあるのかもしれない。

相手は土のメイジ。追いつくのは無理かもしれない。

「ちくしょー…くたびれ儲けの骨折り損…二人を守れたから良いとするか」

なんか、どっと疲れが出てきた。

能力使用状態の時は息が乱れる事も無かったってーのに。

これも能力の一部なのだろうか、と思索していた所。

「だ、大丈夫ですか!？」

と、その時。

森の中から緑色の髪の毛のメガネを掛けた女性が現れた。

ふむ…? この人も仲間、か?

バサッバサッ。

ふと翔く音と共に、青い竜が現れた。

…うわー、風竜か? これ以上敵は嫌だよ、見方であってくれー!

と、半派都合のいいことを考えていたが、一応警戒する。

「ダーリン、大丈夫?」

風竜に乗るキュルケとタバサの姿が見えて、

「(はあ…、助かった…)」

俺は安堵のため息をついたのだった。

だから警戒出来なかった。

カチャ

「助かったわ。」

「ミス…ロングビル？」

「「っ！」」

裏切り者…否、フーケが襲ってくるという事に。

ミサイルランチャーをこちらへ向けるミス・ロングビルもとい、フーケ。

「ちっ…油断した…アンタがフーケだな？」

彼女はメガネを外すと、

「良くわかったわね。」

No. 8! 「vsゴーレム」 (後書き)

て、なわけです第八話です。

実際戦闘と言っても、同じ事繰り返してるだけだったんですけどね..
(; ˊ ˋ 。 ˊ ˋ) ..

まあ、そこは苦手なのでご容赦を。

もう一度アニメを見直そうかな..
それとも原作買ってこようかな..。

後で、「能力レポート」なるものを割り込みで投稿します。
そこに詳細を書いていこうと思うので、良ければ目を通してやってください。

それと。

『ツェン村雨は使い魔を召喚すべきか?』

これについて、意見を聞きたいと思ひまして。

実際、ノーバディー居るなら使い魔要らなくね? って感じではあります。

まあ、することになったらそれで、何を召喚するか決めないといけないですね。

では今回はこの辺で。

誤字、認識の誤りがあれば、ご報告くださいませ。

No. 9! 「捕獲成功」 (前書き)

進展が無い

遅い

短い

がんばった前回に比べて、異常なほどの低クオリティ。

え、量意外特に、変わらないって？

No. 9! 「捕獲成功」

何も知らない、というのはとても怖い事である。

適切な医療方法を知らなければ、下手すりゃ怪我人の命を奪う事があるように。

目の前の女性も――フーケもどうやら？知らない者？のようだった。

「「「「……」」」」

ロケットランチャー
化学兵器をこちらへ向ける、ミス・ロングビル、もとい、フーケ。
そして、それを向けられる俺たち5人。

とても不味い状況だ。

俺だけなら、なんとか能力でもなんでも使えば、逃げ出せるが…。

「（この四人をどう助けるか…？）」

残念ながら、助っ人（鳶、クリーパー）は小屋に放置してしまった。
：というか、それは流石に隠しておきたい事なので使うかどうか、
といえは使わないのだが。

もし使うなら、最初っから使っとけと。

ただ、そうするとこの事態の解決が難しい。
能力もあのアックスソードを回収するまで使えねえし…、説明する
のを忘れたが、

『出した武器を手にした状態のみ、能力の解除・変更が出来る』

これが分かっている事の一つだ。
キーブレードならば、距離が離れてても戻ってくるんだけどな…。

あれ、詰んでね？

それともあれなのか、某ゾンビゲーのウェ○カー（？）みたいに両手で弾を受け止めろと？

——無理言わんといってください。

タイミングみすれば木っ端微塵って、試す度胸ないれふ。

…ロケットランチャー？

あ。

「H A H A H A H A ! !」

「「「「! ?」」」」

「恐ろしすぎて気ににでも触れたのかい…?」

全員ビククリ、フーケは引き気味。

：酷いな、俺はそんなリアクション求めちゃいないのに。

と、兎に角、この空気に耐えられないので行動に移す。

能力のせいで、ダッシュの時に地面が盛大に抉れたが、これなら直ぐに取り押さえられそうだ。

「ちっ！アンタも馬鹿だねえ、死にな！」

単に俺の勘違いだったらどうしよう。

一瞬、そんな不安がおれの脳内を走ったが。

カチッ

…杞憂であつたようだ。

「ふんっ！」

「くあっ…畜生…！なんでだい…！？」

構えたロケットランチャーを蹴り上げ、そのままバク転して姿勢を戻す。

——ふ、カッコつけ乙だな、俺。

ちなみにバク転は鳶直伝のものだったりする。…初めて喋れるようになった時確か彼奴してたもんな…。

強引に持っていたから、腕を痛めたな、罪悪感が微妙に沸くが、…しめたぞ。

——…あれ、どうやって拘束すりゃいいんだ？

とりあはず、両手を背中で組むように抑える。

「ちっ…！」

「諦めろん。…誰か縄もってないか？」

油断は出来ないが…どうやらこれで解決みたいだ。

ガラガラガラ。

所変わり、武器も回収、現在俺は馬車の上である。
座席にはキュルケ、タバサ嬢、逮捕されたフーケ、そして向かいに
はサイト君とヴァリエール嬢、が居る。

何故か俺は運転席に。

どうやら俺しか馬車を扱えないらしい。…かく言う俺も得意ではないのだが。

——本来ならば、事件解決、ではさらば…だったのだが。

『待ちなさいよ、アンタも関係者なんだから一緒に来なさい。』

何故か不機嫌顔のヴァリエール嬢の一言で、俺の同行が決まった。どうやら、街に行くのは後になりそうだ。残念。

まあ…馬車も動かせないのだから仕方ないしな…と思い現在に至る。

「さて…聞かせてもらおうわよ、平民さん。」

「はあ…忘れてくれると有難かったけどな…。んで、お嬢さんは何が聞きたいんだ？」

どうやら事情聴取は回避出来ないようだ。

「あ、俺も聞きてえ事があるんだ！」

「あら、ならダーリンが先でいいわ。」

ふむ…サイト君が先か…という事は、多分俺と変わらんな。

「アンタは…アレ（ミサイルランチャー）の事を明らかに知ってるみたいだった…合ってるよな？」

「うんむ、そうだ。知ってるよ。」

「って事はアンタは…！」

「ちょいまち」

やはり、というように迫るサイト君。
…俺はそれを片手で押し止める。

「ね、ねえ、アンタ達、さっきからなんの事話してるのよ？」

「秘密、だ。…まあ、君たちには害は無いから気にしないでくれ。」

それからヴァリエール嬢は一瞬ムスっ、とした顔を作り…「まあいいわ。」

そう言ってフーケへの尋問へ。

「……。」

タバサと言えば、やたらと分厚い本から視線を外さず、無言。

「……。」

フーケのほうも、尋問するヴァリエール嬢を見ながら、こんなガキに話すことなんてないよ。とばかりに無言。

「はあ…」

とりあえず、ため息を付いておいた俺だった。

学園へと戻る道は平和なようだ。

ただ、地面が雨でぬかるんだりしていて、少し尻が痛くなったが。

「んで、俺からの質問だけでも。君はどういった経緯でここへ？」

「そのピンクブロンド：ルイズに使い魔として無理矢理召喚されただよ」

「わ、私だって好き好んでアンタなんて召喚したいと思ってた訳ないわよ！」

「あれ、じゃあ帰れないのか？」

「…俺は諦めない。なあ、アンタ、帰り方とか知ってたりしないか？」

無様ねW…ゲフン、んー、と言っても俺はどこでもドアなんて事は

出来ない。

藁にもすがるような思い（そう見える）で聞いてくるサイト君。

まあ、解らない気もしない。突然、見知らぬ場所へ連れてこられて、「返せない」なんて言われたら…。

「すまん…俺も解らないんだ…でも、協力しよう！」

「そ、そうなのか…：はあ…」

落胆してるな。

魔法の中に、転移魔法なんてものが残念ながらこの世界にはない。

否、もしかしたら、只知られていないだけで探せば見つかるかもな・
・。

さしずめ、テレポート（空間移動）ってな。

——うん？でも、某白黒ジャッジメントみたいなテレポートだったらどうしよう。

「（俺の能力の中に無いか…：まあ、関わっているとすれば、確実に属性…空間だろうな。）」

「んじゃ…次は私から。…さっきの馬鹿力といい…貴方何者？」

「人間（キリ）」

「私の知ってる人間はゴーレムの拳を素手で止めないわよ…。」

ここに居るじゃまいか。

一応、基本は人間だ。まだ辞めちゃいない。

「……。（疑惑の目）」

「まだ人間辞めたくないだけだよ、言わせんな恥ずかしい」

なんかサイト君が疑惑の目を向けてきたので。

「…なんでフーケはその…？破壊の杖？を盗もうとしたんだ？」

「武器商人相手に売ろうとしたんじゃないの？」

「なるほど…。もう使えないけどな。」

その為に盗んだというのなら、納得出来る。

あれ、というかそれしか目的らしい目的無くね？

金目的なんだろうから。

結局そのあとは、フーケへの尋問を放置、俺への質問タイムで占められたのだった。

No. 9! 「捕獲成功」 (後書き)

雪「酷い出来だ。」

ヴェン「無様ねw」

そして今回も登場しなかったノーバディ。
…何処でどう出そうか……。

N o. 1 0! 「魔法学院」 (上) (前書き)

思いつた分だけ投稿。

前回といい短すぎるよね。

(下) はしっかりいつもぐらいの量にさせていただきました。

No. 10! 「魔法学院」(上)

「へえ…ここがその魔法学院なのか…。」

ホグワーツ…ではなく、トリステイン魔法学院。

現在、長い尋問の末に、若干気分が悪くなるという症状を起こしながらも、無事に一向は目的地にたどり着いていた。

因みにノーバディー達については完璧に隠し通した(ドヤ

——否、聞かれてなかったただけけどね？

「なによアンタ、ここ周辺に暮らす民のくせに知らなかったの？」

「…そりゃー悪うございあした…。うちの領主の娘がこの学院に通ってるみたいだね。」

ヴァリエール嬢…改、ルイズ嬢が失礼な聞き方をしてきたので、むすつとしながら答えてやった。…仮にも俺は命の恩人だぞ…まあいいけども。

「へえ…そういえば聞いてないわね。どこの領なの？」

「センチユエル領」

「ああ、あの平民と仲が良いって言う、変わり者の貴族の…」

「そんな貴族も居るんだな…やっぱり悪い人ばかりじゃないのか？」

今度はキュルケ嬢。タバサ嬢とフーケが空気になってるが気にしない。

気にしたら負けだ。何に負けるのかわからんけど。

いや変わり者って…、まあこの世界の貴族から見たらそうだろうが…。

平民にとっては神様みたいなもんだぞ、多分。

ああ、そうだサイト君…：けして多くはないと俺は予想するがな。

「さて、と。付いたわね、うーん。お疲れ様、平民さん。」

「ああ。ほら、立てよフーケさん。」

「まったく…呑気だねえ…、私はこんなのに捕まったって言うのかい…？」

残念だったな？

ていうか、俺の化け物さをアンタが一番わかってる気がするんだが？

さて、俺もさようなら、だな。

ガシッ

「貴方も来るのよ。」

「…さいですか。」

ドナドナ状態で引きずられるのも嫌なので、仕方なしに付いていく事にした。

「良く戻ったのう！ いやはや…よもや、ミス・ロングビルがフーケとはもう…。」

「でも良く戻ってきてくれました。お手柄ですぞ！」

俺が案内…連行された場所は、中央塔の最上階付近の部屋。

目の前で感慨深げに顎鬚を撫でる老人が恐らく、学院長のオールド・オッスマン…だっけか。

となりのハゲている中年男性は誰だろうか。…まあ教師と考えるのが妥当か。

「ふむ…で、そちらの方…」

「ヴェンと申します、センチュエル領のほうから旅で。」

「おお、あのセンチエルからとは。では、ハティ嬢の事は…？」

「ええ、知ってます」

そうかそうか、と何故か嬉しそうに言うオスマン老人。

この様子なら、ハティは良くしてもらっているのだろう。…出来れば一目見てみたいが。

（下へ続く）

No. 10! 「魔法学院」 (上) (後書き)

雪「書いてる途中で話の流れ忘れたんだよ、言わせんな恥ずかしい」

鳶「無様でござるw」

ヴェン「アニメ見直してこいよ (^ ω ^)」

雪「おっすおっす」

No. 11! 「就職」 (下) (前書き)

今回頑張りました。

：面白いかどうかは、作者からじゃわかりませぬが。

雪「今更ながら、原作沿いは途中まで：変わる所は変わります。多分。」

クリーパー「(パクッ)」

雪「おいばかやめろ」

No. 11! 「就職」 (下)

「さてさて…、リーナ嬢の息子…で合っとるかの?」

「え?…母と知り合いで?」

現在、少年少女4人の微笑ましい表彰式を見届け、他の人は出ていき。

——俺は目の前の老人と対話していた。

驚いた。どうやら知り合いのようだ。

「ああ、そうじゃ。一時期、この魔法学院に務めとっての。…ふむ、煙管…煙管は…」

「教師、だったんですか? (…また新事実か…、両親の過去となるとまだなんかありそうだな。)」

オスマン老人は…いや、敬意を込めて学院長と言うべきか。
と、いっても、目の前の老人から威厳らしい威厳は感じ取れない。
もっと厳しいの想像してたけどな。

「おお、あったあった…」煙管を無事発見する事が出来た老人を見ながら、俺はそう思わずには居られない。

「ふむ、当時は土のトライアングル、スクウェアメイジが少なくて
の。手を貸して貰ったのだ。」

「なるほど…、…それで、引き止めたのはこれが理由では無いんで
しょう？」

「ほっほっ…そう急ぎなさんな。…そうじゃの、一つ、お願いがあるのじゃが…。」

顎鬚を撫でながら、暖かい笑をオスマン学院長は作ると。

「君の腕を見込んでのお願いじゃが…警備員として働かんかの？」

ここでもさかのスカウト。

「警備員、ねえ。」

俺はオスマン学院長に、「時間をください」と答えた。

「ほっほっ。ゆっくり決めて貰って構わない。」老人はそう返した。

——よく考えてみれば、この学院、警備員らしい警備員が居ない。

学院で生徒意外に居るとすれば、雇われている平民のメイド、そしてコック。

で、無論教師。

鎧を着て、槍を持ったような者は居ない。

「こんな警備体制で大丈夫か？」

芝生を歩きながら、つい、つぶやいてしまった。

——否、事実、本当に大丈夫なのか、と思わずにはいられない。

『な、なんで警備員とかを雇ったりしてないんですか……？』

『ふむ……まあ、わしらもメイジじゃからな、一人風のスクウェアもおるし……。』

『まあ単純に特に必要とする機会がなかったんでの。』

『は、はあ。……で、何故今になって？』

まあある程度は予想が付く。

フーケに入られた事による危機感から、だろう。

『ミス・ツエルプストーリーの話では、君がフーケを取り押さえたらし

いの？』

『ええ。…でもそれが？』

『配属するにも、只の平民警備員ではメイジに勝てるかどうか怪しいからの。』

『君の父上と同じ、？メイジ殺し？なら、安心できるという物じゃろう？』

老人は、そういうと、ウィンクをしたのだった。
——待て、アンタ、父さんの事も知ってたのか。

「よっこしようにちっと。…警備員、ね。」

取り合いず、学院内の塔を背に、芝生に座り込む。
再び、どうするべきか思索をする。

——ここで警備員になる事のメリットは？

まあ、それは…。

『君一人じゃから大変かもしれんが…ふむ、給料は生活に困らない程度は出そう。衣食住も保証するぞ？』

…目を光らせて放ったオスマン老人の言葉でわかるように、中々破格の条件なのだ。ここにいれば、取り合えずは困る事はあまりないだろう。

——メリットは？

それは、各地を巡れなくなる事。
休暇は虚無の日等にとってくれるらしいのだが、たかが一日で動ける範囲も決まっているような物。

…あれ、俺って旅に出たんだよね？

しかし、旅に出るといっても、路銀等が尽きてしまった時、働き口無い、というのも避けたい。

「（なら…一日でもそれなりに回れるぐらいの移動手段があれば…？）」

移動手段、ね。

この世界には、前にも述べたかもしれないが、科学が全く発達していない。

基本、移動手段は使い魔に乗る、もしくは馬なのだ。

さて、こうなると無論、能力でどうにかするしかないという物。

候補としては、

No. 2の空間属性。…恐らく、テレポートでの移動が出来て、楽なはず。

まあ、転移場所を間違えれば、生き埋めというところでもない失敗事故が発生する。

——出来れば使いたくないな。

まだ他にもある。

No. 3の風属性。単純に、風の力を操っての飛翔だ。

まあこれでいいのかもしれないな。

スピードを上げればスピードは出るし…。

「（ノーバディー達に何か役に立つのが居ないかな…）」

ふと、ずしっずしっ、という音が聞こえ、そちらの方へ音を向けると…。

「お、確か…タバサ嬢の所の使い魔だったか。」

青い鱗に青い瞳。まさしく、ファンタジーの代表格と言える…

ドラゴン
竜。

俺の考える竜というのは、威風堂々とした、人に懐かない生き物を想像するのだが…。

「きゅん」

この生き物（竜）、人懐こいようで、おまけに鳴き声がやたらと可愛い。

…思わず拍子抜けしてしまったのが良い思い出だ。

「なんか…ようか？」

「きゅいきゅい」

全長6メートルもあるが…どうやらこれでもまだ幼いほうなのだから。成体はどれほどになるのか、想像がつかない。…出来れば会いたくもないのだが。

ソイツはゆっくりこちらへ向かって歩いて来ると、頭を下げて俺の顔を覗き込んでくる。

「……！」

間近で見るとすごい迫力。

ただ、目は近くで見ると、日の光を反射して綺麗な宝石に見える。

「ン……」

とりあいず撫でておいた。

——触り心地？意外とさらさらしてたな。

目を瞑って気持ち良さそうにしている。∴コイツ、可愛いな。

「∴お前、主人乗せて飛んでたよな？」

「きゅい！」

俺がそう聞くと、竜は自慢げに鳴く。

「お、お前、言葉、わかるのか？」

「きゅ！」

すげえ。

しばらく撫で、ゆっくりしていたのだが、
授業が終了した事を知らせる鐘が鳴ると、何処か満足げに竜は飛び
去っていった。

——主人（タバサ嬢）のところへいったのだろう。

さて、俺も答えを出しに行くか。

「失礼します。」

「おお、ヴェン君か。入ってくれて構わんよ。」

ノックし、ドアを開けて中に入る。

と、オスマン老人は出ていった時と変わらず、煙管を吸っていた。

——仕事しないのか…？

机を見ても、種類らしい物はのっていない。

オスマン老人は体をこちらに向け、

「やってくれるかの？」

俺はその質問に、

「ええ、お願いします。」

できる限りの笑顔で答えたのだった。

No. 11! 「就職」 (下) (後書き)

主人公、就職。

オスマン先生の口調とか色々気になるでござる。

イルククウかあいよいよイルククウ。

実はヒロインはイルククウにしようかと思ってまふ。

鳶「……。」

雪「悪かった」

お知らせ（前書き）

今回はお知らせ会。

次回投稿の際に、割り込みで最初付近へ。

お知らせ

<http://ncode.syosetu.com/n5828y/>

新しく、「No. 0の使い魔」という小説を立てました。

こちらは「ルイズに召喚される」ほうです。

一応こちらでも試しとして一話、投稿してましたけどね。

宜しければこちらも見守ってやってくださいませ。

現在、能力レポートについては筆記中です。

もし、この小説を見ている方に、

「こんな能力の使い方をして欲しい。」

というものがあれば、

機関Noもしくは名前、その技の詳細などを書いて送っていただければ幸いです。

作者の文才で想像通りに実施できるかわかりませんが、期待に答えられるようがんばりたいです！

No. 12! 「学院内詮索(上)」 (前書き)

とりあはず出来た前半をUP。

今更だけど、ヴェンの姿は二次元的な姿に脳内変換してくださると幸いです。

No. 12! 「学院内詮索(上)」

魔法使い。

それは子供のならば、一度は憧れた事はあるだろう、職業。
箒に乗って空を自由に舞い、人々に平和を贈る……そんな魔法使いに。

少なくとも、俺もその一人であつたはずだ。

はず、というのは、無論前世の幼少期思つた事なので、記憶がほとんどないからなのだが。

——だが、昔の記憶というのは案外思い出しやすい。

……まあ、俺だけかもしれないのだが。

「…にしても…。」

現在も、その魔法を目の当たりにしている訳だが…。

魔法で飛んでいるのは三角のトンガリハットを被った少女でもなければ、
レベテーション

白黒のいかにも、というような少女でも、スーパードレスに変身しちゃう魔法少女でも無い。

——中年のハゲたおっさんである。（けして口に言える物ではない）

「（ここのメイジは箒とか空飛ぶ絨毯とか使わねえよなあ…。）」

無論、若いメイジのほうが多いだろうが。

魔法使いときたら、『箒に乗って空を飛ぶ』が結構固定されていた身としては、

単身で宙を舞う姿を見ると、物足りなさが残るのだ。

まあ、おっさんには合わないが。

箒と魔法使いに対する考えは兎も角。

「おお、これですこれ。？始祖が残したマジックアイテム？…やっ
と見つけた…」

「それで、何を探すんですかい？」

「ええ、そうですぞ、ヴェン君。？破壊の杖？について何か記述があるかどうか…。」

「なるほど。」

名前は基本的には、ヴェン君と呼ばれている。

呼び捨てでも良かったのだが、そこは妥協してくれなかったようだ。俺？俺はコルベール先生と呼んでいる。

年上だからね。

コルベール先生が膨大な本棚の中の本から一冊の厚い本を取り出した。

緑の冊子で、金色の文字で題名が掘られている。

――…こん中にミサイルランチャーの項目なんてあるのだろうか。

「すぐにでも探しに掛かりたいが…、？破壊の杖？という名前はたしか学院長が付けたとか…」

ううむ…時間が何の道掛かりそうだ」

「探索なら自分でも良いですよ？」

「いや、君の案内が先だよ。それにここは他にも、立ち入り禁止の所があるからね」

立ち入り禁止？…それはそれで気になるな。

あれか？秘密の部屋か？三頭犬が守ってたりする？

というかこの世界にケルベロスとか居たりするんだろうか。

…と、冗談はこれぐらいにして…。

「立ち入り禁止…？例えば？」

「例えば…：宝物庫等は許可が学院長の許可が必要だったりするな」

「成程」

宝物庫か…：そういえば、あのミサイルランチャーも宝物庫から持ち出されたみたいじゃないか。

他には何があるんだろうか。…すごく気になるな。

これ以上、執拗に聞いても、有らぬ疑いを受けそうなので止めておく。

「（然し…：良くもまあ、ゴーレムと互角に戦えるような俺を警備員に選んだな…）」

気づけば、俺に宝物庫を狙われるかもしれない、というリスクもあった訳だ。

——単純に気楽な老人なのか…：それとも狸なのか。少なくともあの老人は只者じゃない事は確かだな。

「(ま、雇われた以上、相応の働きはさせていただくけどな)」

「…しかし…時間が惜しいな…仕方ない、…今から言う場所は立ち入り禁止です、そこにさえ入らないと約束して頂ければ、自由に見回ってもらってもかまわない。まずはさっき言ったように宝物庫、…それから…」

結局、研究意欲に負けた(大丈夫か?) コルベール先生に、禁止場所を教わり、別れた。

見かけ通り部屋は多いらしい。

——全部覚えられるわきゃねええ。

長い廊下、階段を抜け、俺は再び外へ。

さんと降り注ぐ日光を肌に、中庭を歩く。

こういう天気の日、何処か木製のベンチに座って、昼寝へと洒落

込みたくなる。

とりあえず、初日である今日は門の当たりを中心に警備すれば良いようなので、父譲りの剣を背に突っ立ってみる。

「……。」

暇だ。

そのせいか、段々と眠くなってくる。

残念ながら、某中国と呼ばれる門番のように立ちながら寝る技術は俺にはない。

実にご教授願いたいものだ。…仕方ないので詮索も兼ねることにした。

トリステイン魔法学院の広さは…例えるなら…東京ドーム…1個半、ぐらいか？

まあ、魔法学院はここしかないらしいので、この広さも納得ではあるが。

なんでも、他の国からの留学生も居るらしい。

とりあえず、門の外に出る。

目の前に広がる光景は、草原と馬車等が通る道があるだけの、寂しい光景。

…結構、孤立してる場所あるんだな…。

やっぱり、警備が気になる俺だった。

「出てこい！」

俺はできるだけの小声で叫んだ。

…いまやってるのは、カードの中の物を元に戻す作業だ。

PON、と軽く弾むような音をたて、白い影がその場に現れる。

「ただいま参上！ 援護を求め——」

「おいばかやめろ」

「うぼほっ！」

決めゼリフも考えていたのかコイツは。

然も大声で叫ぶものだから、少々手荒だが、ヘッドロックして鳶の顔を押さえつける。

——こいつ、何処に口があるかわからねえもん。

「静かにしてくれ…、敵が現れたからお前を呼んだわけじゃないから安心してくれ。」

「むぐっ…」

とりあえず、コクリコクリ、と頷くのを確認して、拘束解除する。
俺はため息を付くと、長ったらしい現状説明始める。

「なるほど…：此処の警備員に、でござるか。」

「ああ、でも周囲を見てくれ、コイツ（警備）をどう思う？」

「すごく…薄い（警備が）です…というか主人しかいないではござらんか！」

「ああ、案外大変な仕事を受け持ちちゃったらしい…。」

ふむう、と老人が考え込むような仕草で、思案している鳶。
鳶達ノーバディーは記憶というものがあるのだろうか。

少なくとも、機関メンバーにあることは確かではあるのだが…。

「なあ、鳶。」

「んむ、なんでござるか？」

「ノーバディーは…お前だって、今は心はあるけどよ…心を失った抜け殻…だったんだよな？」

自分でも今更ではあるが…というか前にも聞いた事があるんだけどな。

「そうでござる。…基本的には、残るのは俺の身、魂のみ。その残った身…これは記憶も含まれているでござる。」

「ただ…」

「ただ？」

何か思い出そうとしているように見える鳶。

だが…数秒後には頭を振り…。

「そういった記憶も、闇に飲まれるその日まで永久に生き続ける内に、忘れてしまった…。」

「…」

「でも、最近、主人と接する上で思い出した事がござってなあ…。ほんの少し、それも僅かな事ござるが…」

「か、片方は思い出したくないトラウマでござる…あばばば。」

「何か、思い出せたのか？…じゃあもう片方…。」

確かに、ノーバディは最終的には奪われた心と同様、闇に溶けてしまっただけ無い。

だが、キブレードによって、奪われた心と体を取り戻した時、元の姿に戻る事が出来た筈だ。

生ける屍。

…ノーバディというのは、悲しい存在。

鳶にトラウマを残した物とは何だろうか？…わからんな。

「誇り高く、だけでも他人の為に身を差し出せるような人間であった、という事でござる。」

拙者は今まで、有意義を持てなかったあろうなあ、心を手に入れてからというもの、記憶も無くて素直に喜べなかったのでござる。でも、僅かでも思い出した、…この事だけで満足でござる。

志を思い出せたのだから、その志を貫くだけでござるよ。」

一見、能天気で何も考えてなさそうな奴だけでも…

「そうか…。」

よっぽど、人間より、人間らしいじゃねーか。

『う、五月蠅いわよ！この馬鹿犬ツーーーー！』

キュピーン ドゴオオオオオン！

…、ひでえタイミング。

「およよ、随分と派手にぶっばなされたね」

「…ててて、あ、ヴェン。聞いてくれよ、ルイズのやつさ…」

なにやら、体の所々が焦げている。

——あの爆発を体に受けて良く生きてたな。マジで。
顰めっ面で、寮から出てきたサイト君に声を掛ける。

「…アイツが魔法を使えたらここまで苦労しねえのになあ…」

「…待ってくれ。魔法が使えない？」

可笑しいぞ？現にあの大爆発が起きてるじゃないか。
確か…あの規模の爆発を起こすには、爆炎のスペルだな。

因みに、爆炎というのは、火と土の合成魔法。火2つと土1つによるトライアングルスペル。

空気中の水蒸気を気体状の油に『鍊金』し、空気と攪拌して点火させる、という物だった筈だ。

まあ、実際は爆発事態で吹き飛ばすのではなく、酸素を奪う、という目的だが。

と、この質問に答えたのは別の声だった。

「ああ、あの娘っ子は魔法が使えねえ。どんなスペルを唱えても、

ドカン、だ。」

「?!（何処から声が?）」

「おう、兄ちゃんこっちだ。坊主が背負ってる剣だよ。」

「お、おお…剣が喋ってる…」

なんと、声の発生源はサイト君の背負っている錆びた剣からだった。
?（刀の根元）をカチカチ動かしているではないか。

剣の長さは150センチほど、デカいな。

「お、おう。俺の名前はヴェン。アンタは?」

「俺か?俺っちの名前はデルフリンガーだ。よろしくな、兄ちゃん」

「それで…、彼女は、ヴァリエール嬢は何のスペルを唱えてもあの
爆発が起きるのか?」

「そうだ。詠唱の仕方もちの振る方も正しいんだがよ、どうも理由
がわからねえ。」

ますます、可笑しいな。

実際、俺もメイジなので解る話なのだが、魔法は失敗して爆発する
物ではない。

精神力だけ使用し、何も発生しないのだ。

母も確か、失敗した時はそうなると言っていた。

その事を一人十ひと振りに話すと、

「それじゃあ、ルイズが失敗する理由ってのは失敗とは関係ないのか？」

「娘っ子の魔法が失敗魔法じゃないとすると……あー、思い出せそうで思い出せねえ」

「ああ、そういう事かもな。……まあ飽く迄予想の範囲だけでも……」

では、一体なんだというのか。

：駄目だ、お世辞にも頭が良いとは言えない俺の頭じゃ答えはでそうにない。

——というか、あの爆発起こせるなら、下手な魔法より強くないか？

しかも、なんでもない場所から突然、だ。

あの爆発が正確に体の内部に定められたら、と思うだけでぞっとする。

「あー、サイト君、君も中々な苦勞人だな……」

「：今思っただが、？君？付はよしてくれよ。ヴェンのほうが年上だろ？」

「それもそーだな。んじゃ、遠慮なくサイトと呼ばせてもらう。」

適当に会話を終わらせると、サイトが何やら洗濯でもするのか、置
を持って水の流れ出している場所へ歩いていく。

洗濯…、男に自分の下着を平気で洗わせるとは…もしかして男とし
て見られてないのか…。

否、もしかしたら人間とも見られてないかもしれないな、と俺は心
の中で合掌した。

願わくば、元同じ世界の住人として、彼に幸せが訪れるように、と。

「…デルフリンガー降ろしたほうが作業しやすくないか？」

「ルイズが、『私が買い与えた物なんだから、いつも身に付けてな
さいよ』って五月蠅いんだよ」

「…そうか。」

No. 12! 「学院内詮索(上)」 (後書き)

鳶との会話の辺りが失敗してそうな雰囲気。
まあ簡単に言えば、

「主人との交流で記憶(志)が僅かだけ戻った。それまでは、心があっても志が無い状態だから、素直に喜べなかった。でも、今は、志がある。昔の自分がそうしていたならば、今も同じようにするよ。」

てな感じです。

因みにトラウマというのは、…予想が付く方が居るでしょうか。
今は秘密ですw

所で。

「ノーバディーには一般武器は当たらない」と今小説の設定では、
というか原作でもそうなるんですが…。

ストラグルバトルの棒は設定通り、当たりませんでした。

(競技の為のおもちゃの武器)

何処にでもあるスケボー(スケートボード) 何故かノーバディーに
攻撃が入る。

(各所設置してある移動用の物)

これってどういう事でしょうか。

ストラグル棒「なんという理不尽」

20011. 11/21.

警備員となる平民は居るそうです。

——小説では、居ないことに。

さーせん、警備兵の皆様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0840x/>

No.0 !

2011年11月21日12時05分発行